杉の下みち

吉野口驛から一群の都人士

吉野口の停車場を立ち出る群集が、花見時ならば、眞ッ黑くて、菰筵の中から黑石を投げ出した樣に見ゆるが常なるも、時は秋で、恰も陰曆の盆休みを利用し、吉野山上の大峰に參詣する者、何れも白衣の行者服、手に手に錫杖突き立て、中にも兜巾篠懸け山伏姿の先達は、法螺を吹き鳴して先に立つ。一行數百人、遠く眺むれば眞ッ白くて、菰筵から白石を投げ出したかと疑はる。其群集を押し分けて、十二三臺の人力車を列ね、洋服、和服、白衣、黑衣、パナマ帽、ヘルメット帽、鳥打帽、十人十いろの扮裝で、走り出した一行がある。是れは此度吉野川の水上に、林業の實況を見ばやとて、遙々東京から下りたる市の議員と吏員との一行なり。

恭しく惟みるに、大和國吉野郡、吉野の山は、往昔、天武天皇、皇姪大友皇子と干戈を交へ給ひしとき、暫らく逃れて雲深く隱れ給ひし鄕、降ては九郎判官義經が、長兄賴朝の嫌忌を避け、暫く身を白雪の中に逃れたる地、更にまた中古には、建武中興の元勳、大塔宮の義兵を擧げて賊徒の攻擊に惱み給ひし所、續いては南朝の天子の行在所として、後醍醐天皇以降、五十餘年間の行の宮が、數しば賊軍の爲に襲はれ、忠義無双の勇士達が、鮮血を以て山を染め、終に一と目千本の櫻花に培かひ、『是は是はとばかり』後の世の詩人を感嘆せしめたる『花の芳野山』の在る所。また其の山續きの大峰山は、往昔役行者の開きし靈地、今山上の大峰山本堂は、行者の尊像を安置し、登りて其所に詣づる者は、無病息災、福德圓滿、願ふて叶はずといふこと無しとて、年々參詣の信徒數萬人。今は實に登山の信徒が、東西南北より、群がり集まる最中なりとぞ。

今しも芳野山の麓を、吉野川の流れに沿ひ、千本櫻の演劇で、阿里鮨の名を著はし

たる、三位中將維盛卿の隱れ場所、下市町を川向ふに眺めながら、六田の柳の渡津を渡りもやらで、川上指して車を走らせる東京客の一行は、抑そも何の目的で來たのであらうか。花見には時節が違ひ、大峰登りには足が弱さうなり。普通の芳野山見物としては、六田の渡津を渡らぬが不審と、疑はるゝも道理なり。我等の一行は、大峰詣でにあらず、また芳野見物にあらず、況して時ならぬ花見では勿論無い。實は吉野川の上流に、古來名高き吉野木材の產地なる林業の實況を見るべく來たのだ。

其の目的は林業視察

蓋穀の下なる東京市の議員や吏員が、都市事業經營の參考としてならば、大阪か京都へ行くは理窟あれど、雲深き吉野の山奥へ、抑そも何の必要あつて出懸けた？　此れは何人にも第一に起る疑問である。で、先づ其の林業視察に出懸けた理由、一と通り陳べねばならぬ。

現今東京全市民、一百六十餘萬人は言ふに及ばず、畏れ多くも九重の、雲井の上の宮城内に、日夜用ひさせ給ふ御飲料水まで、總て東京市の水道から供給するのだが、其の水道の水が、近年は、降雨あるごとに濁り易く、市外淀橋の水道給水工場には、沈澄池、濾過池、淨水池などの設備あつて、澄ませる裝置は整ふても、水は却々澄み切らず、明礬や硫酸礬土を水に和せ、辛くも澄せて供給するが、其れが爲に年々明礬等の費用多く、殊には餘り多く其等を混和しては、飲用者の衞生をも害する危險がある。本來此の水道の爲に、東京市民は八百五十萬圓の大金を費やし、僅に出來上つた大工事で、實に全市民の生命を維ぐ泉源である。若しも衞生に害ある樣では、實に容易ならぬ大事件だ。まだ其ればかりか、此の水道は、當初設計した時には、市民一人一日の使用分量を四立方尺と見積り、百五十萬人まで使用に堪ふべく、一日の最高供給量を六百萬立方尺と定めて設備したのに、市民の數は最早百六十萬人以上となり、また一人一日の使用量も、仲々四立方尺どころか、盛夏の候、盛んに入浴したり行水

したりする頃には、平均一人一日に七立方尺以上を使ひ、また現今全市民の中で、まだ堀井戸水を使ふて、水道水を使はぬ者も四十萬人位はあるらしいといふ時に、既に今明治四十二年八月中には、一日に八百萬立方尺以上を消費したことがある。幸ひに貯水池に餘分の貯水があつたればこそ足りたが、斯かる事が長く續けば、忽ち斷水といふ騒ぎが起る。若し暫時でも家々の水道に、供給が止つて、飲むにも汲むにも水が無いといふとき、不幸にして火事があつたら、蒸氣吐筒も空しく手を拱んで眺めるばかり、東京全市を焦土とする大事變が起らぬとも言へぬ。思へば思へばオ、恐や恐や。

此れでは大變と氣が着て、近頃其の水道の水が濁るのを止めることゝ、水の分量を増すか、少なくも減らさぬことに就て研究すると、水の濁るのは、水源の山々で、森林を濫伐して雨水を貯へる力が無くなり、雨が降れば一時に流れ出して洪水となり、雨が止めば忽ち水源が涸れるのと、森林の無い爲に崩れ易く、其の崩壞の爲に濁りもするといふ事と　川の兩岸なる山間の村々で、傾斜の急な地面に、草木を燒き拂ふて畠を開き、之を燒畠と名けて二三年間づゝ耕作するので、其の畠の土は雨降るごとに瀧の如く泥水と爲て川へ落ち込み、其れがまた川水を濁す大原因と爲り、水源涵養林が減て水量も次第に減るといふ事が分つた。

吉野林業を水源經營の模範

偖斯く水源が濁り、また水量が減る原因が、水源の山々に森林が減り、燒畠が殖る爲だと分り、また其の森林荒廢の結果は、川水が減る上に、洪水の害も増すといふ事が知れた上は、水道水源の經營として、是非とも森林を經營せねばならぬ。其れには如何したが宜いかと研究すると、奈良縣大和吉野川の川上は、地勢が甚だ東京市水源の多摩川筋に似て、其の地質も、双方とも多くは秩父古生層で、所々に石灰岩が交り、杉や檜の培養に適し、現に吉野川は川下から川上まで、山嶺も水涯も盡く杉林が

養成せられて、若しも俳人に見せたらば今は『是は是はとばかり杉の吉野山』と歌ひ相である。それと同じく多摩川筋も、山の入口なる武州西多摩郡は、世に名高い青梅丸太の産地で　到る所杉林だが　上流の甲州北都留郡や東山梨郡は、前に言ふ通りの荒廢した山林や、焼畠で、水源を涸らし、水質を濁して、土地の人民は僅に稗や馬鈴薯を常食として居る。聞けば吉野川上流の村落も、昔時は矢張り焼畠を耕やし、稗や馬鈴薯を喰て居たのが、森林業が盛んになつてから、地方は大いに富で、生活の程度も、都人士恥かしきほど立派になつたと聞くので、然らば參考の爲に其の吉野林業を一見しようと、偖こそ視察の一行が、遙遙と吉野の山奥に踏み込むことになつたのだ。

先づ眼に着く澄み切た川水

急ぎ候ほどにはや上市町に着て候。吉野口驛から此所までは、稍や平地で、吉野川の兩岸には水田もあれど、此所から上流には、近くに妹山と背山が兩岸に迫つて、其奥は全たく山ばかり故、此所は吉野郡中、川上、中荘、小川の三郷の咽喉で、多摩川筋の青梅町と同じ地勢なれば、吉野郡役所も此所にある。山奥に森林の富源があるだけ、市街は青梅町よりは遙かに賑ひ、小學校建築の美なるは、何人の御殿かと疑ひ、郡立圖書館の整頓せるは、都會の地にも多く比儀を見ぬ。銀行もあり、會社もあり、大阪まで長距離電話もある。勿論其筈で、林業家として數百萬の巨富を擁する人々が少くない。川の向ふ岸の吉野村大字飯貝に、水に臨む壯大なる建築は、吉野材木同業組合の聯合事務所で、之に伴ふ會議室もあり、また材木檢査所もあり、上流から流し下す木材は、此所の檢査を經ざれば一本も下すことを得ぬ。此の同業組合は、共同して運搬の便を謀り、道路を開き、河筋を浚ひ、また造林法や伐木法の改良を謀りて、吉野林業の發達を助くる一大要件と爲て居る。

上市町の香月樓で、午餐の膳に對へば、鹽燒も、胙も、フライも、椀盛も、總て鮎

づくめの料理、頗る口に適ふ。樓上から眺むれば、吉野山の官幣大社吉野宮は、遙かに長峰の櫻の林の中から隱見して、花時の眺望左こそと思ひやられ、軒を流るゝ吉野川は、前夜の雨を經ても、水は透明で淵の底に泳ぐ鮎の眼球まで鮮かに、多摩川の水の清冽を誇る江戸ッ兒が、其の水の濁るのを持て餘して居るとき、澄まぬでも差支なき此の川水が、斯くまで澄みに澄みを見て、同行の一人江崎夢豪氏句あり、

淵の魚數ふべく秋の吉野川　夢豪

一同口を揃へて、『川上に森林養成の必要は、成る程分つた、此れだ此れだ。』

愈いよ分け入る吉野の雲

上市から上流一里、宮瀧までは人力車を通ずるが、其の先きは五社峠の峻阪があるとて、一同草鞋に脚袢といふ服裝に身を固め、威勢好く香月樓を立ち出る面々は、東京市區改正局長角田竹冷宗匠、帝室林野管理局技師江崎夢豪宗匠を兩先達として、東京市參事會員、同市會議員、同水道課員等の諸氏と、上市町の林業家、吉野郡役所の書記、土地の案内者等の人々に、余を加へて總て十四五人だ。

川の右岸、妹山の下を過れば、右も左も何所を見ても常綠針葉樹の杉林だ。若樹は稍尖りて、針の如くに伸び、老樹は梢頭の樹冠圓く廣がつて、太陽の光線を蔽鎖するので、成るほど若い者には圭角多く、老成者の圓滿なるは、人も杉も變りが無い哩。など、妙な所で人生觀を談ずるもあれば、筏を下すべく丁寧に手の入た河筋に、生憎其の時期でないとて、筏下しの見られざるを嘆息する望蜀の徒もある。折りしも川上から荷車で運び來るは酒樽の樽で、婦人が背に負ふて來るを見れば、是も酒の樽丸だ。何れも灘の酒造用材で、灘の芳醇が天下に鳴るのは、吉野木材を用ゆるが爲だ。また吉野林業が發達したのは、灘の酒樽と樽丸の用材として、盛んなる販路があつた爲だともいふ。

熟々吉野郷の造林法を見るに、當初は極めて密に、一町歩に一萬本許りつゝ植うる

故、杉の若樹は細く且つ長く育ち、十五六年を經て高さ三間ばかりとなるに及び、其の二割餘を間伐し、更に三年許の後、また殘餘の一割餘を間伐し、爾後三年目位を隔てゝまた殘餘の二割許りづゝ漸次間伐し、四十年目位の後は、六年位を隔てゝ一割五分位間伐し、八十年位に皆伐するを普通とす。斯く密植の結果は、木理細かにして正しく長く立ち、棟梁の材にも適し、また酒搏樽丸の材にも適するのだ。

茲で一言説明するが、酒搏とは、醸造用酒桶の周圍に用ふる材料で、樽丸とは主として四斗樽の周圍に用ふる材料だ。別に底丸、蓋丸といふ材料もある。樽丸は長一尺八寸、厚五分で、四斗樽六個分の用材を一束とし、圓く束ねて運び出し、其の種類は最上等を内稀と名け、木材内部の赤味と外部の白味との中間を取るのだ。次は極稀、次は節、飛切などあり。此の内稀の材を用ゆる樽に入れて貯へたる酒が、灘の菰被りの一本氣で、油の樣な芳醇が出來る相だ。

五社峠の三本杉

人力車は宮瀧といふ地に着た。一行中足の最も弱き者數人が、網曳き後押し附三人懸りの人力車で、川筋に沿ふて遡つた外は、皆な徒歩で五社峠についたが、山麓の川を横ぎるとき、橋の上にも下にも、兩岸には城壁の樣な巨巖が峙ち、上の方は巖の間を掘り割つた細い川筋を、急湍が瀧の樣に走つて、橋の下で淵と爲り、深さ二三丈だ。舊時は此所の瀧で、筏乘りの怪我する者が多いので、材木業組合は、川中の巨巖を碎いて、今の川筋を開いてから、其後は安全に下られるが、此所の淵で集つた鮎を捕ると、一舉して捕り盡さるゝので、橋の上下數丁の間は、漁獲禁止區域となつて居る。五社峠には、材木組合の檢査所があつて、陸送の木材は、悉く此所で檢べる相だ。愈々其の五社峠へかゝると、生憎雨が降り出した。聞けば毎日午後は雨天が常なる相で、大峰登りの行者が、川端の御筏宿といふ看板下げた家に、霽れ間を待て居る。

秋雨や行者うづくまる筏宿　水哉
秋雨や石南木ひたす行者宿　夢豪
看板の御筏宿や秋の雨　竹冷

此んな句が出來た、全く實況だ。峠は材木運搬の爲に、此所も材木組合が修繕して、道路は案外に好く、頂上まで登ると五社明神の祠がある。其の側に、古來名高い五社峠の三本杉といふが、何れも切り伐されて横はるのを、一行中の誰やらが、切口の直徑を測ると、五尺五六寸づゝ、而かも材質に空洞が無い。聞けば三本で五千何百圓に賣れた相だ。樹は三百年以上の老幹とて、直段も大した物だが、此れが無くなつて峠の一名物を亡うた。

頂上から谷底を望めば、羊腸九折の屈曲した新道の下に、桃源境ともいふべき村落が見えて、鷄の聲や犬の聲が聞ゆる。路傍の石は、碎けて圭角あるのが、崩れて川へ落ち、水中で揉まれて終に珠の樣な砂礫となるのな相で、地質も地勢も、成る程武州の多摩川水源に酷く肖て居る。其の坂路を降り盡せば、川上村の大字大瀧といふ地、久しく林業界の泰斗として知られた土倉庄三郎氏の居村だ。

五　右衞門風呂に按摩の三助

舞臺一面の山幕を切て落すと、正面に田舍の旅籠屋、背後の山々は、總ての杉林が夕靄に淡く掩はれ、下手には谷川の流れが、巖間の急湍と爲て、水の走る音高く響き、上手の山路を降り口と見せ、店頭には五六人の男女が、約束の客を待つ準備も出來たと見えて、口々に

『モウ四時だ、大抵見えさつしやり相な者だ。何でも東京の御客が十人ばかりと、上市の北村さんや、郡役所の久保さんも、御出の相だ。ドレ据風呂の火でも見て置きませうか。』

などゝ言へながら奥へ入るとき、上手の山路から十二三人の一行が、雨に濡れながら

降りて來ると、同時にまた下手の川續きから、三人曳の人力車が二輛、勇ましく駈けつけて、梶棒を庭先へ下す。『ソレお着きだ』と俄かに動搖めき、草鞋の紐もとく〳〵と、皆々二階と下座敷、五組ばかりに分れ入る。

是が大瀧の旅舍阪口屋へ到着の光景。頓て道路を隔てた向ひ側の家へ伴はれて、交る〳〵湯に入る。底に釜ある五右衞門風呂、湯殿といふも名のみで狹いが、背中を流す三助が、肩の揉み方が苦勞人の樣だと、誰彼れともに思つたが、宜なる哉此男が、此地唯一の按摩であらうとは、後に至りて始めて知た。其夜は樓上の三室押つ通して

の大一座、料理に口に適ふ物は無れど、斯かる準備にと江崎技師が、東京から持參の鰤の細卷の燻肉や、小魚の義助煮で晩餐を了し、食後の餘興には、一行中の誰彼れが、講談や落語や、偖は謠曲や田舍唄など、隱し藝の競進會で、一同面白く夜を更かした。

林業界の泰斗の居村

此所を大瀧と呼ぶは、吉野川の流れが、巖間に懸つて大瀧を爲す故名けられたのだが、此所も彼の材木組合が、巖を碎いて水路を通じ、急流ながら筏を下さるゝ樣にした爲、瀧といふ物は無くなつた。此所は川上村二十三の大字の一で、村役場の在る所、土倉氏の全盛時代には、元帥大臣などの貴顯が、數々來り臨み、大阪から料理人を招いで饗應したと云ふだけに、電信も通じ、山間の小都會だ。不幸にして土倉氏は、方今また往日の全盛なきも、氏が率先して林業の利を皷吹し、自ら川上村の大臺原山深く分け入り、吉野川の川上まで、筏を下すべき水路を通じ、吉野郡から紀州の北牟婁郡まで、新道を開き、終に方今吉野全郡で、年々百六十萬圓乃至二百萬圓つゝの材木を輸出する大利源を開いた大功績は、吉野林業の榮ゆる限り、長へに沒す可らざるものである。

吉野林業發達の大原因

茲で略ぼ吉野林業發達の事情を說けば、吉野の一郡は、奈良全縣下の六分七厘を占め、其の郡內は、大臺ケ原山を中心として、川筋は三方に走り、北西なるが吉野川、南なるが北山川、南西なるが十津川で、北山十津の二川が、末に會して新宮川と爲て紀州熊野新宮へ注ぎ、吉野川は、川上村を過ぎ、上市町を經て、下流は紀の川と爲て和歌山に注ぐのだ。地質の多くは學者の所謂秩父古生層に石灰岩を交ひ、杉檜の培養に適する上に、谷間の川筋が材木運搬に都合好く、而かも新宮や和歌山からは、海路で大阪へも東京へも自在に運ぶ便利がある。此の天然の地勢と地質に加へて、土地の人々は借地林制度とて、他人の土地を借り、立木一代限りの契約で造林し、其の立木の間伐皆伐とも、收入の一部分を地主にも分つ方法と、森林保護制度として、山林の保護は、地主か又は土地の信用ある人に賴み、常に盜伐や山火事を監督し、後に間伐皆伐する毎に、また其の收入の一部分を山守料として分ち與へ、また造林の手入れには、總て土地の人を使用し、苗圃の養成でも、移植、下刈、枝打、仆れ起し、間伐、皆伐、運搬まで、男女老幼ともに職業を與へるので、此の二制度相俟て、資本家も地主も、地方の住民も、互ひに利益ある故、人皆な山林を見ること自己の財產と同じくそれが爲に保護は十分に行はれて、林業は年々に發達し、之に加へて同業組合の巧みな制度ありて、終に現今の隆盛を見るに至つたのだ。

顧りみるに武州の多摩川流域は、水源の大菩薩嶺や雲取山は、海拔何れも六千尺前後で、恰も和州の大臺原山と伯仲し、地質は多く秩父古生層に石灰岩を交へ、多摩川の長さは水源から川口の川崎まで三十五里、是も吉野川と殆ど同く、材木運搬の便利も多く、材木の販路として、吉野に大阪神戸ある如く、多摩に東京横濱がある。而かも材木業としては、古來青梅附近には青梅丸太の產地として知られながら、多摩川水源地方だけは、造林を怠り、燒畠の幼稚な生活に甘んずる爲に、水源は涸れ、水質は

濁り、産業起らす、住民は貧しい。之を吉野川の上流、川上村の一村で、一萬三千二百三十八丁歩の面積中、山林のみが一萬三千五十三丁歩あつて、一ケ年に林業の收入が平均三十萬圓以上あるを見ては、負け嫌ひの關東ッ兒も、唖然として言ふ處を知らず、相顧りみて、

『此んな旨い利益のある事業で、水などは眞の副産物として澄みもし増しもするのだから、此奴ァ大いに考へねばならないなァ。』

何所まで行ても杉林

大瀧から翌る日は、川上四里の柏木まで遡る。途中の大字迫といふ地で官幣大社川上神社を拜し、道すがら川の左右の山々が、山嶺から水涯まで、盡く杉林で蔽はれ、其の林の間には、岩苣萵とて、普通の苣萵に似て、菫の樣な優しい花の咲てるが多いので、

岩苣萵や百萬本の杉はやし　水哉

新涼や杉の木立の十一里　竹冷

などの句を得。其夜は川上村大字柏木の川島屋といふ旅舍に泊ると、其頃は丁度陰暦の盆で、一年唯だ一夜の盆踊りが、村内の各大字で申合せ、前夜は何所、今夜は此所と更代に催し、此夜は隣り村の上多古にあると聞き、一同御苦勞にも夜更けてから宿の借り下駄の硬い鼻緒で、足の甲を擦り剝きながら、見物に出かけると、大神宮の境内なる廣場の中央に櫓を立て、若き男女は今夜を晴れと着かざり、ヤートコセイ、ヨイコラショーといふ囃しに合せて、面白相に踊つて居る。

ヤートコセイ、ヨイコラショーと踊哉　竹冷

杣の子も禰宜の子もまじり踊りかな　水哉

一行中にも興に乘り、二三遍踊り廻つた者もある。

都人士の眼球を拔く田舍人

此所まで來たので、吉野林業の眞相も、最早大抵分り、更にまた柏木に名高い鐘乳洞の、不動窟と菊の窟に入て、恰も多摩川上流の日原川に、日原鐘乳洞があると同じきを視、益々地質の同じい事も證據立てられたので、翌る日は歩を旋してまた大瀧に泊る。時に驚いたのは柏木でも此所でも、田舍不相應に物價が高く、宿料一泊金二圓五十錢、按摩賃一回三十五錢、二里ばかりの間の人力車賃金五圓に、車夫三人の宿料一圓五十錢が追加だと聞き、同村村會の議決を見ると、議員の寶袋が一泊金七拾錢づゝで、茶代までも其内から仕拂ふて足ると云ふのと、また一昨年の春、余が吉野山から人夫一人伴ふて十津川郷を旅行したとき、翌る日午餐の握り飯まで添へて、大抵一泊金四十錢位だつたのに回想して、此所では大分貪ぼる哩と、氣が附た。

都人に目に物見せつ唐辛子　水哉

翌る日は、大瀧から、嶮岨な山を、人夫に腰を押させて越し、大峰登山路の半腹なる吉野山の背後に出で、尾花の中の西行庵と、苔清水の舊蹟を訪ひ、竹冷君は、

庵室や尾花なびけば屋根が見ゆ　竹冷

など口吟み、歸路吉野山に、延元の古陵や、如意輪堂を拜し、藏王堂の大塔宮の陣營跡、吉水院の後醍醐帝行在所跡を巡り訪ひ、山を下つて再び上市町へ戻れば、吉野川の水は例に依て澄み、透明玉の樣だ。（明治四十二年）

西國順禮記（二）六月六日城崎溫泉にて　水哉

雨の半日を、舞子の樓上から、淡路島に對して去來の船を數ふ

五月雨や見えみ見えずみ淡路しま

翌る朝晴る、舞子から姫路を過ぎ生野の隧道を出て但馬に入る、此邊りは今端午の節句なり。

菖蒲葺ほす門に武者絵の幟かな

豐岡近傍は田植の盛りにて城崎溫泉には湯の香とともに青葉に風薰る。

田植歌はづむや少女茶を運ぶ

杉の下みち

高野詣で

海内無双の靈境

敕、琴絃已絶、遺音更清、蘭蕙雖レ凋、餘芳尚播、故贈大僧正法印大和尚位空海、消ニ疲煩惱一、抛ニ邵驕貪一、全ニ三十七品之修行一、斷ニ九十六種之邪見一、既而佛日西沒、渡ニ溟海一而仰ニ餘輝一、法水東流、通ニ陵谷一而導ニ清浪一、受ニ密語一者、多滿ニ山林一、習ニ眞趣一者、自成ニ淵藪一、況太上法皇、既味ニ其道一、追ニ憶其人一、誠雖ニ浮天之洪濤一、何忌ニ積石之源本一、宜ニ加ニ崇飾之典一、謚號弘法大師、とは、是れ延喜廿一年十月廿七日、醍醐天皇の朝、贈大僧正空海に大師號を謚り給ひし詔勅なり。弘法大師如何なる人ぞ。今を距ること千五六十年の昔、桓武帝の延暦二十三年五月唐土に渡り、惠果和尚に就て秘密灌頂の壇に入り、兩部瑜伽の大法を受傳し、三年にして歸朝す。其れより後、普ねく諸國を遍歷して、眞

言の一宗を弘め、更に無上の靈地を選び、修禪の一院を立て、濟世護國の根據と爲さんとの大願を起し、嵯峨天皇弘仁七年六月紀伊國伊都郡の西、四面高嶺、人跡を絶つの地を選み、上表して其地を開き、荒藪を芟り夷らげ、一寺院を建立せんことを願ひしに、直ちに勅允を蒙り、國司の力を藉り、七堂伽藍を創立したるもの、即ち今の高野山金剛峰寺なり。仁明天皇承和二年三月十五日、大師は諸弟の遺訓を畢りたる後、山内の奥に設けたる淨室に入り、同二十一日、結跏趺坐して即身成佛したる所。爾來今に至るまで殆ど一千一百年、法燈長へに傳はりて、一日も滅すること無く、歷代天皇上皇の歸依最も厚く、宇多天皇の昌泰二年十月臨幸し給ひし以來、白河、鳥羽、後白河、後鳥羽、後嵯峨、後宇多の上皇、後醍醐天皇、光嚴院法皇等、聖駕數しば此の深山幽谷の雲を分けて登らせ給ふ。武將には足利尊氏、義詮、義滿、義持、義敎等、交はる〳〵登山して參詣し、豐太閤また天下一統の後、母の追善の爲に月卿雲客大小諸侯を率ゐて登山し、一世の盛儀を極めたることあり。故に平安朝以降、皇室の盛衰

武門の興亡に幾變遷ありと雖も、此所のみは諸佛集會の淨土、海内無双の靈域として、古來其觀を改めず。參詣の貴賤日として群集せざること無し。況して近來鐵道の便開け、東西よりする者、皆な車室の内に坐ながら、高野山下に達するを得べく、殊に今明治三十八年には一、山各寺院皆な寶庫を開き、前古未曾有の展覽會を催し、登山の善男善女をして縱覽せしむると聞き、余も大阪に博覽會を觀たる序に、此の靈山に登りて參詣することゝ爲りぬ。

登山の順路

高野山に登るの道、古來七所あり、世に高野の七口と稱し、大門口、不動阪口、熊野口、龍神口等の名あり。大門口を表道とし、不動阪口を裏口とし、裏口は婦人を伴ひたる者の、境内入口なる女人堂に宿泊する爲に登る所として知られたりしに、今は山麓の紀ノ川に沿ひ、紀和鐵道全通し、西は和歌山にて南海鐵道と接續し、大阪、岡山、廣島、下ノ關まで連なり、東は大和の五條にて、南和鐵道と連絡し、奈良、京都、津、名古屋、東京まで連なるに至りたれば、參詣者は皆な鐵道により、山下の高野口驛、または橋本驛より登山し、兩驛の何れよりするも、山の半腹なる神谷驛にて會し、此所から不動坂を登り、女人堂の前を過ぎ、高野山の境内に入る故、表門口は寂びて裏門口のみ榮ゆるに至りしと云ふ。

大阪より鐵道によりて參詣するにも、また西より南海紀和の兩鐵道によるものと、東に關西、南和、紀和の三鐵道によるものとの兩路あり。其の高野山麓に達する時間賃錢とも、大差無くして一得一失あり。

關西は近くして賃錢安きも、橋本口より登山するには、高野口に比して山路一里遠く、隨つて人力車、山輿等の賃錢多く、また數回乘替を要する不便あり。之に負けじと、南海は紀和と謀りて、日々數回直通列車を發し、難波より高野口まで最急行三時半にて達せしむる列車を出せば、關西もまた南和と連合し、王子五條間は、常に直

通列車を發し、東西互に高野山を中心として、旅客の吸收を競爭しつゝあり、故に往復ともに同一線路に由るよりは、東西線を一週して、奈良、高野山、和歌浦、堺、住吉等を巡覽するを便と爲す。余は四月十五日午後大阪を發し、先づ堺の水族館を一覽して、其夜は和歌浦に遊んで泊る。翌る朝は、紀三井寺と和歌山市の岡公園とに遊びたる後、汽車は和歌山市驛を發し、一路平坦の紀和線を紀ノ川に沿ふて遡り、高野口に着したるは正午に近かりし。

登山のしるべ

高野口は、舊時名倉と呼びたる一市街、停車場は市街の北端に在り。驛より高野山上の女人堂まで約三里半、他の橋本驛よりすれば、女人堂までは約四里半といふ。而して橋本口は、高野口に比して稍ゝ多く人力車を利用することを得。高野口驛停車場の前には、二戸の旅館あり。互に競爭して、口器しく客を招けど、斯かる所の習ひとて、客に親切ならざるは伯仲の間に在るらし。參詣者は多く手荷物を託せんと欲し、故さらに就て懇ふも、手荷物は停車場にても保管するなり。此所より山下の椎出村までは、人力車を通ずるも、徒歩を嫌ふ者は初より山輿に乘る。三里半の坂路片道一圓八十錢、雨天の日は二割を增す。余も其の一旅館に行李を託し、雨天なりし故山輿を傚ふ。

紀ノ川の渡津まで、十五六丁の間、平坦にして車行便なり。川を渡れば九度山村とて、曾て關ヶ原役後、大阪城に入るまで、眞田幸村が、蛟龍雲を失ふて暫らく沼澤中に蟄伏したる地、此所から十町許を隔てゝ、西方に樓閣の輪奐たるを望むは、慈尊院とて、弘法大師が久しく其の母を養ひ、其の沒後に葬りたる處、高野山には女人の入るを禁じたれば、大師自身の肉親も、山下に迎へて時々自ら來り慰めしなりとぞ。親子の情は大師も凡夫と異ならざるこそ人間の至情なるべし。故に登山の信者は、高野口の西、妙寺驛より下車し、先づ慈尊院に詣づる者あるも、迂廻なれば余は直ちに登

るに、九度山から一里許の間、路傍の清流巨巖の間を走り、涯しては淵と爲り、激しては瀬と爲り、風景頗る愛すべく、雨漸く急なるも、山輿の合羽を蔽ふに忍びず。既にして渓流を脚底に見棄て、急坂を攀ぢて登れば、踞したる脚は頭より高く、前なる輿夫の踉はまた、余が脚よりも高し、傾斜の峻急想ふべし。山は石を以て骨と爲すも、地質は甚だ杉に適し、新たに植うる稚杉、緑梢皆な長く伸びて蔓の如く、生長の速かなるを示す。

山路登り盡きて稍〻平地に出れば、驛あり、神谷といふ。橋本口より登り來る者も此に會す。旅館あり、酒樓あり、白面の酌婦店頭に徘徊し、壁に三味線を懸けたるさへ、小遊廓の觀を爲す。聞く所によれば、山上の青年僧侶、夜間此所まで下りて一醉夢の快を買ひ、即夜歸山するもの多く、また參詣者も、山上にて精進潔齋したる後、此所に下りて山上の窮屈を慰むる所なりと。大師も濟度しがたき凡夫は、此所にて濟度を受くるにやあらん。驛を過れば、細流に架する一橋あり。極樂橋と云ひ、此れよりまた不動坂の峻坂と爲る。橋は實に淨土と穢土との境界なるが如し。不動坂は羊腸曲折すること四十八回、老杉道を挾み、下方は壑底深くして樹の根を見ず、上

方は密樹枝を交へて、梢の盡る所を知らず、樹は皆な幾かに老幹の半腹を望むのみ。急坂十八町、攀ぢ盡せば清めの不動あり。清泉路傍に涌き、人皆な就て手洗ひ漱ぎ、旅中の不淨を清む。之を過ぎて數丁、女人堂あり。堂側に木戸嚴めしく構へて、金剛峰寺境内なる大標柱を樹つ。舊時女人禁斷の淨境、此より内へ入る能はざる婦人は、此堂まで登りて宿し、遥拜を濟まして歸りしとぞ。今は何人も入るを禁せざれば、唯だ昔時の名殘りを留むるのみ。

山上の別天地

女人堂の前を過ぎて行くこと數町、參詣人取調所あり。元來山上には旅館無く、古來宿坊と稱して、所緣の寺院に就て宿泊し、追善供養の事を托す。故に山上四里四方の疆域、一千餘の僧坊ありて、全國の所緣を區劃し、何國の人は何院に屬すと、豫め之を定めたるにて、參詣人取調所は、貫籍を調べて其の所緣の僧坊を指示するなり。

余は豫め東京人の宿坊といふ常喜院に赴く意なれば、輿中より常喜院所緣に告げて過ぎ、愈〻大小寺院の伽藍堂塔楷を比ぶる間に入り、志ざす常喜院に着したるは黄昏なりき。輿夫等數〻途中の茶屋にて休みたれば、高野口より此所まで五時間を費やしたり。寺院は言ふまでも無く僧侶のみながら、頗る懇切に客を待ち、渇沐の設備、酒食の供給、毫も遺憾なく、食器の美に、寢具の豐かなる、尋常旅館の比にあらず。寺院といふよりは寧ろ精進ホテルと稱して可なり。

翌る朝、雛僧に案内せられて山内を巡拜し、先づ表口なる大門に至る。門は境内の西にて、不動坂口とは反對の位地にあり。實に古來當山の正門なり。大門の屋根は銅瓦を以て葺き、建坪は百二十坪、高さ二十二間餘、表行十五間、奥行九間あり。寶永二年の再建にて、丈け一丈六尺の金剛力士左右に立つ。建築の輪奐、彫刻の雄偉、先づ人の膽を奪ふ。門前より遠く西方を望めば、淡阿山陽の諸州、雲烟縹渺の間に隱見す。歩を轉じて來路を歸れば、十五丁にして一山七堂伽藍の中心とも云ふべき金堂あり。

高閣、高サ二十五間、周圍十三間、本尊は一丈六尺の金色坐像藥師如來、金扉の内に安置せらる。脇士は、金剛薩埵、不動明王等の六體にて、萬延元年の再建なり。金堂の傍なる大塔は、曾て日本最高の塔なりしと聞くも、天保十四年の火災後、再建の功未だ成らず。其他にも灌頂堂、御影堂、准胝堂、大會堂、三昧堂、孔雀堂等、皆なる同時に燒けたるも、今は再建概ね成る。此の邊に數株の老櫻あり。山下には花謝して既に十數日を過ぎたるも、此所のは未だ芳唇を開かず、氣候の差違甚きを知らる。

當山の主坊金剛峰寺は、金堂の東二町許の所にあり。現今一山一百三十餘坊と、全國の末寺末派を統轄し、當初は開山大師より第二世眞正僧正の廟所として建立せしを、文祿三年豐臣太閤の登山せしとき、金堂、大塔等を造營し、當寺を大法會の場と爲してより、累世一山貫主の住寺と爲り、天保十四年の火災後、元治元年再營したるものといふ。東西三十間南北三十五間の大伽藍、老杉森々として四面を圍み、境内に大鐘樓、護摩堂、眞然堂あり。曾て關白秀次、父太閤の勘氣を蒙り、高野に逃れ去り、て後に自害したる柳の間も、また當寺の内にあり。高野山興隆會の本部を此所に置く。會員には普ねく寺内を案内し、歷代帝王行幸の御座の間に、就て拜見するを得せしむ。然れども一山の内、本山のみは參詣者の宿泊を許さゞるなり。

金剛峯寺より更に奥の院に赴くには、東方八丁にして一橋あり、一ノ橋と呼ぶ。大門より一ノ橋まで、二十五六丁、中間通路の兩側には、西院谷、南谷、一心院谷、五室谷、千手院谷、本中院谷、小田原谷、蓮華谷、東谷の十谷に區劃し、僧坊を以て數條の市街を爲し、彩欄彫閣數百相連なる。寺院堂舍の夥多き、眞に全國無比なり。其中にも無量壽院、遍照光院、金剛三昧院等の大伽藍は、其の宏大なること金剛峯寺に伯仲す。

奥の院

一ノ橋以東、奥ノ院即ち大師入定の地まで、尙ほ十五六丁あり。此所よりは別に專

門の案内者ありて、參詣者を導く。老杉古檜路を挾み、森々として昼尚ほ暗らき所、兩側は舊時全國の各諸侯と、古今諸名士の墓碣〻、數百相連なり、案内者一々聲高く呼で過ぐ。墓は多くは五輪の塔にて、其大なるは高さ三丈餘、臺石の大さ二間四方なるあり。また熊谷直實、平敦盛、曾我兄弟、豐太閤、明智光秀等の墓あり。皆な遺髮または齒牙、爪片等、遺骸の一部を埋葬したるなり。中ごろ清流の路に横はるあり、所謂高野の玉川にして、本朝六玉川の一なり。橋を御廟橋といふ。之を過れば歴代皇室の寶塔を列ね樹て、先帝并に英昭皇太后の寶塔もあり。最も新しきを小松宮殿下の塔と爲す。此邊今は宮内省の管る所とぞ。寶塔拜し盡せば、燈籠堂あり。廟前の禮拜所にして、燈火は油を點じて千年の昔より、片時も光を斷たず、人の燈を捧げんことを乞へば、燃えつゝある燈蓋に油を注ぐなり。注油の燈數は參詣者の求むるによりて多少あり。是れ所謂長者の萬燈貧者の一燈なり。其の奥は即ち開祖大師入定の靈地、周圍は石の瑞離を繞らし、石壇の上に寶形の堂を建つ。大師即身即佛の靈軀は、千有餘年間變ること無く其中に安んぜらる。壇の左方に經藏あり。石田三成、其の母の爲に建立し、高麗本の一切經を納むるといふ。右方に骨堂あり、八角寶形の堂、諸人の遺骨を納むる所、是れ大師が、我が山に送る所の亡者の遺骨は、我が三密の加持力を以て、兜卒の淨土に往生せしめ、當來に於て菩薩の位を得、慈尊說法の聽衆たらしむべしと宣言せられたるに由るとぞ。四方參詣者の日夜群集し、渴仰隨喜の念禁じがたきも誠に故あるなり。

日牌月牌の追善

巡拜了りて元と來し路を歸り、更に無量壽院にて寶物展覽會を見る。斯かる靈域に秘藏せられつる千年來の國寶、金岡、兆殿司、吳道子等の名畫、歴代の宸翰、大師の眞筆、運慶、長慶等の名作等、一々擧て計ふ可らず。見る限りは盡く稀世の珍、前後應接に暇あらず。一々取り立てゝ說かんには、數月の熟覽を要す。更に宿坊に就て亡父

母の爲に、一位兩名の日牌を供ふ。日牌とは、靈牌を本寺の側なる壇上に供へ、日々に讀經せらるゝなり。別に月牌といふあり。月に一回命日にのみ壇上に供ふるなりとぞ。

斯くして寺を辭するに臨み、寺の宿泊費はと問へば、元より參詣者の意のまに〳〵供するに任せ、また厘毛の請ふ所なし。此に於て精進ホテルの親切に兼ねて、寺院の眞面目を失はざるに感服す。

此日午後六時、昨日來與天の留まり待つ山輿に乘り、再び神谷より椎出を經て、高野口驛に下れば、日は全たく暮る。停車場前の一旅館に投宿し、翌る日五條、高田、王寺等を經て、正午には既に身は大阪の博覽會場内にあり。此行、攝、河、泉、紀の五州を巡廻し、時を費やすこと二晝夜、和歌浦、紀三井寺、高野山を歷覽し、高野の山上に僅に土を踏めるのみ。交通の機關も發達したりと謂ふべし。

（明治三十八年）

養老の瀧

養老の瀧を音にのみ聞き、徒らに思を馳せること久しかりしが、今年戊申九月七日、大阪からの歸り途、汽車を大垣驛に辭し、人力車を養老に驅る。舊城の天主閣を右に望み、舊藩主の戸田伯爵邸を左に眺め、道幅廣からぬ市街を過れば、郊外は一面の水田、豐かに稔りて途すがら三里許りの間に連なり、早稻は穗を垂れ、晩稻は正に花の盛りなり。近日東宮殿下の行啓を迎ひ奉らんとて、新たに修めたる道路は、坦かなること砥の如く、車輪輕く輾つて塵を揚げず。水田盡きて山麓より、坂を登ること半里許り、路傍の櫻と楓とは、最早薄紅葉して、少婦の嬌羞を帶びたるにも似たり。忽ち鞏諮の聲林間より洩れ來るを心當てに登れば、軈て瀧の下に着く。見上れば飛泉高さ百尺、幅六尺ばかりなるが、銀河空より落つ、知らず何れの邊に雲を破れる。蛟龍天に昇る、抑〻那邊の淵に潛むか。飛沫散て霧となり、濛々として谷間に漲ぎり、暫

らく佇めば衣袂靈く濕ひ、徐ろに涼味の骨に徹るを覺ゆ。

出來秋や酒つくるべく瀧の水

歩みを旋して養老神社を拜し、試みに姿を蕉翁が掬水の池に移し去て素心庵を訪ひ、庵主の嬌比丘尼が、公會堂に登る。此所も行啓を迎ふる準備に忙はしげなるも、請ふて樓上より眸を放てば、尾濃勢の三州の平野は、近年稀なる豐作の田の面、見渡す限り綠りなるが、微

婀娜な昔の面影を想ひやり更に坂の半腹まで降りて、寸人豆馬亭と云ふに憩ひ、誘はれて前面なる養老郡の

風に戰ぎて稻の花の香を送り來る。東北の信、甲、飛、江の山々は、霽れたる日には雲を突て連なると聞けど、生憎此日は霧立ち罩めて、眺めを縱まゝにせしめぬぞ憾みなる。即日大垣へ歸りて、夕の東海道上り汽車に乘る。車中は客に塡めて膝を容れかねるほどながら、窓を開いて懷かしき養老の山を望めば、模糊たる碧靄の中に隱れても、尙ほ彼の轟轟の瀧の音を耳にする心地す。

瀧つ瀨や見ゆる限りは稻の花

（明治四十二年）

冬季温暖（十字結）

足の出る夜着の寒さや十返舍

馬の脊な十勝の野邊に霰かな

大根ひく妹や十字の赤たすき

水哉

養老の瀧

瀧の箕面

『箕面へ御案内致しませう!!

近頃大阪に行けば、友人は皆な斯う云ふ。箕面は實に近來關西に於る賣出し遊び場の流行兒である。夏の瀧、秋の紅葉、大阪府の公園として、昔時から名高いが、近來更に大に其の評判を増したのは、箕面有馬電車が、大阪から其所まで開通し、梅田から箕面まで、六里の間を一時間で到着するのが、早朝から深更まで、五分毎に發車して、一日の中に何遍でも往來が出來る樣になつた爲だ。

舞鶴から阪鶴線の鐵道で、余は丹波の山の中を過ぎ、寶塚へ來て始めて攝津の平原へ出ると、急に夜が明けた樣に廣い蒼空が望まれ、武庫川の流れを瞰下した寶塚の溫泉場には、瓦甍粉壁の旅館軒を並べ、面を吹く風まで都會の香がする。其の停車場へ降りると、

『やあ君! 早かつた。』

と聲かけて待つ人がある。是は前年歐米膝栗毛の友人なる大阪の小塚蘇南氏が、箕面へ案内せんと、豫め約して此所まで迎ひに來て居たのだ。箕面有馬電車は大阪から此所まで開通し、途中から岐れて箕面へ通じ、今後此の寶塚から一方は有馬溫泉へ、他の一方は西の宮まで通ずる計畫な相だ。で、直ぐに電車に乘り替へ、途中で下車して中山寺を訪ふ。

寺は西國三十三番札所中の第二十四番、善男善女の參詣者が、常に輻湊する所とて、停留所は直ぐに其の門前に設けられ、左右の茶屋には、客を見ると口々に『お懸けなさい。お休みなさい』と叫ぶ。石段を攀ぢ登つて、恭しく本堂を參拜してから、馬蹄石、夫婦石、石の唐櫃、爪形天神など、此所の名所は何れも匆々に看過したが、看過し難きは境内の眺望で、本堂横手の丘上から眸を放つと、北に六甲、麻耶、甲の諸山が、築山の如くに重なり、南に大阪灣の海が庭の池の如く、東にはまた信貴、生駒の

諸山が、暮靄の間に淡く連なり、攝河泉の風景を一眸の中に集むる大パノラマに對する樣だ。

中山寺前から再び電車に乘り、牡丹で名高い山本や花屋敷などの停留場を過ぎ、諸白の銘酒で古來上戸黨の涎を流させたる池田の市街も、空しく窓から眺めて走り、石橋停留所で箕面線に乘換ると、其所から東北へ一里の間は、田圃中の新道、行く手を遮ぎる行人稀に、電車は全速力のヘビーを懸け、瞬く間に箕面停留場に着く。今春開通したばかりで、近所には新設家屋の普請中なるが多く、電燈も未だ柱の据附中だ。村落を三四丁ばかり入て、箕面川の溪流に架けた橋を渡ると、其所から始めて箕面公園となる。

兩山左右から迫つて、其の間の清き流れは、石を嚙で琮々と聲を爲し、水には鮎や鰕が棲む相だが、時は最早黄昏で、公園の遊客も多く去り、道を挾む若葉の楓は、蔭薄闇くして、四邊寂寞、唯だ水聲のみ佩玉の響を傳へるとき、蘇南氏が歩を停めて、

『彼れを聞き給へ。』

と云ふに耳傾むければ、水聲以外に何物か、コロ〳〵コロ……キヨツ〳〵キヨツ……ビユ〳〵ビユ……宛ら珠を轉がす樣な聲が、頻りに水聲に和して起る。是は皆な河鹿だ。

兩岸稍〻平坦の地には、旅館を兼ねた料理店が、チラホラ新たに建てられて散在する間を過ぎ、頓がて辨財天で知られたる瀧安寺を右に見て、道を跨いで架けた橋の下を潜り、茶店の庭で遊客が、頻りに義太夫を語る傍を過ぎ、闇がり路を半丁ばかり登れば、此所にも新らしい旅館兼帶の料理店、琴乃屋といふへ着た。二階には客の聲賑かだが、川岸の別館は、全然俗界を離れ、流れに臨んで楓林に圍まれ、風呂も釜も水屋も備つた茶席だ。余等が其の全館を占領し、浴衣に改め、湯に入て、麥酒の盃を手にするとき、軒を繞る流れに、河鹿が盛んに啼く。外國のホテルで、晩餐の食堂に、音楽を聞きながら小刀を運ばした前日の遊びが、偲ばれて殊に嬉しい。此夜蘇南氏は

避け難い用務があつて鬼燕提灯で路を照らし、十時頃に歸途に上つたが、余は終夜飽くまで河鹿を聞き明かした。

翌る朝、宿の女將に案内せられ、溪流に沿うて瀧に行く。其の間十丁ばかり、兩岸盡く楓林、今は青葉の隧道を爲し、道は山腹に通じて、上下左右、盡く楓樹ならぬは無く、樹は皆な老て、大なるは一抱へに餘る。下を流るゝ谷川も、青葉に映つてまた青く、滿目總て綠りに、身もまた綠化するかと疑はれ、秋には是が盡く紅葉するかと思へば、其の美しさが思ひやらる。暫時にして急に驟雨の濺ぐ音に驚き、ハテ雲も無いにと怪しみつゝ、山蔭を出ると正面に、石壁の一角缺けた所から、雪山の崩れた樣な瀧が、眼前に落ち散て、飛沫は忽ち霧となり、旭光に映じて五彩の虹を現ず。前に驟雨かと驚いたは此の瀧の音だ。瀧の高さ十一丈、幅三間ばかり、勢ひ猛烈にして萬弩齊しく發するの概がある。聞けば是れ畿内第一の大瀑と云ふ。瀧壺の傍、共同椅子を配置し、近くに二軒の茶屋もあり、流れに横はつて橋あり、渡れば道は對岸の山腹にも通ず。實に此の瀧こそ、秋の紅葉と力を協せ、大阪から電車を曳かせた大魔力を有つ。附近に新築の樓々が、壹間は客の斷はり切れぬ繁昌とは、抑ゝ偶然でない。

昨夜の河鹿、今朝の瀧、滿身の俗塵を一掃し去て、箕面を背後に再び電車に乘り、石橋で乘り替へると、岡町、服部、三國、十三など、平野の間をひた走りに走り、新淀川の長橋を渡れば、世界は紅塵萬丈の大阪市と化し、北野を過ぎて梅田停留場、東海道鐵道と接續す。其間正に一時間弱、市中を貫通して新線路を此所まで引入れ、乘客の便利を圖りたる會社の苦心が察せられる。聞けば大阪市の助役を首とし、吏員が數人、之が爲に工事の人柱と爲て、社會的に葬られたさうだ。（明治四十三年）

夏季混題　（五の字結）　水哉

綠陰や五郎がつなぐ裸馬
五段目の獅子の行衛や皐月闇
瀧一の笑面

東山陰道紀行

瀬戸の日和山で車夫の忠告

『旦那！陸を行くのは御止しなさい。城崎から宮津まで、十七里の間に、峠が三つあつて、綱曳きで一日懸ります。其れに引替へて、此の津居山から汽船に乗れば、半日で宮津へ着きます。

案内の車夫が斯う言ひながら、更に海上を指さして語を續け。

『御覽なさい彼の右の方にズッと遠く突出たのが丹後の經ケ崎で、彼の蔭から右へ廻ると宮津へ這入るので、二日に一度の汽船が、丁度明日の十二時に出ます。冬ならば浪風もありますが、今時汽船に乘らないで、陸地を行くなんて人はありはしません』

此れは余が但馬の城崎溫泉から、北へ一里なる津居山港の背後なる、瀬戸の日和山

山陰の奇勝

天の橋立

津居山港の日和山

城崎溫泉の玄武洞

へ登つて、四方を眺めながら、明日は陸路を宮津へ行くといふたので、案内に伴ふた車夫が、親切に忠告して、汽船に乗ることを勧めるのだ。此所は日本海に面して鋸の齒の樣に海中に出入する岬角を左右に望み、眼界頗る廣い。

此所からは海路半日で達する丹後の宮津港へ、ワザ〳〵綱曳人力車で十七里の山路を越すのは、如何にも好事の樣だ。が、其の陸路を行くと、但馬第一の都會、毎度義士傳の講釋で御馴染の、大石義雄夫人の郷里なる豐岡町もあり、同じく講釋で名高い仙石騒動の本舞臺たる出石町もある。また但馬から丹後へ出ると、日本三景の隨一なる天橋立で、横一文字の絶景を、股の下から覗く樗峠もある。若しも雨天ならば兎も角、天氣さへ好くば、矢ッ張り陸行と臍を固めて、

『明日の事は明日決める、今日はまだ午後三時だ。此れから玄武洞へ行かう！

天然の妙工玄武洞

城崎の玄武洞は、豊岡町と城崎町との中間、四山川の右岸なる山腹の地質が盡く材木狀の巖から成り、其巖が、何れも石臼の樣に上下が平たく、周圍が六稜または八稜なるが　何千萬となく正しく連なり重なつて、縱に柱の形を爲し、川の左岸を走る汽車の中から眺めると、天然の大建築が、川に面いて立つ樣に見ゆるのだ。で、城崎溫泉の浴客は、家根船を圓山川に浮べ、下流一里の津居山港から、上流一里遡つて玄武洞まで、徐かに漕ぎ廻るのを第一の樂しみとする相で、其の邊りには岸に繫いで客を待つ屋根舟が多い。が、余は時間が無いので、舟遊に暇なく、車を旋して川岸を走らせ、城崎停車場の傍を過ぎ、所謂玄武洞の對岸で渡し舟に乘り移ると、日に燒けて顏色の眞黑な十二三の少年が、舟に棹さして、川といふても幅五六十間の湖水の樣な、上下何方へ流れるか分らぬ水上を、漕で對岸に着いた。

川岸から仰げば、二丁ばかり上方の山腹に、太い石柱が太古の廢城の樣に並んで、柱と柱との間は、天然の伽藍が、山の腰深く三室に區劃せられて並ぶ。阪路を登りて近けば、柱と見えたは盡く平たき天然石の重なつたので、伽藍かと見たは其の石を取り去た跡だ。最も奇なるは伽藍の天井で、例の平たき石が、正しく並んで、上方に連なり、宛かも蜂の巢の樣に靈妙不思議の形を爲す。洞の底は、透明に清みたる水が池を爲し、宛から巧妙の石工が敷き詰めた樣に、同じ天然石が平らかに並ぶ。之を洞と云ふには餘りに巧みに構造せられ、之を伽藍と云ふには、上下左右とも總て天然の巖石である。洞は何れも幅七八間、高さ約五間、奥もまた五間位で、向つて右なる洞の上は、斜に材木を並べた樣に、同じ石材で幾多の梁の狀を爲す。其の柱も梁も、皆な六稜または八稜で、直徑二尺位なるが、長さ何丈となく長く連なり、挺で離せば、厚さ六寸位の盤石と爲て一枚づゝに分る。で、石材と爲すには極めて都合好く、而かも殆ど無盡藏で、一里ばかりの間、全山皆な此石材から成るといふ。世に材木巖といふものは所々にあるが、此所の樣に大規模にして且巧妙なるは、他に比類無い。實に天下一品で、造化の妙工に驚かざるを得ない。玄武洞の名は、寛政三博士の一人、柴栗

山が此地に遊んだ時に命じたので、後に齋藤拙堂、篠崎小竹、野田笛浦などの諸名士が、交はるく遊び、皆な名高い詩がある。

流汗淋漓の城崎見物

其夜は城崎溫泉に宿つた。翌る日は快晴だ。昨日車夫の忠告もあつたが、余は陸行と決心した。余が宿は油筒屋と稱し、溫泉中の舊家で、主人はまだ若いが、余が宮津行の陸行を贊成した。

『陸行も宜しいが、此所から直ぐに人力車に乘るは不利です。午前十時半の汽車に乗ると、豐岡まで三里の間は二十分で着きます。其所から先きの人力車は、豫め電話で豐岡の驛長に準備を頼みませう。で、マア徐々と、溫泉寺から水明樓跡まで御見物なさいませ』

主人は斯く言ひつゝ、直ぐに電話で豐岡へ人力車の準備を頼み、自から先に立て案内に出懸けた。城崎の市街は、三面山を繞らして、一面圓山川に臨み、城崎川の流れは、市街を出て圓山川に注ぎ、山陰東線の鐵道は、姫路から播但二國を横斷して、方今此所まで通じ、近くは津居山港から、汽船が東西に往來する故、溫泉地としては甚だ便利だ。

西村氏は先づ市街背後の山麓に導く。其所には藥師堂ありて、門前の兩側に、數十の石燈籠が並ぶ。是は皆な浴客が、長い間の痼疾が癒つて歸るとき、御禮の爲に奉納したのな相だ。更に急な阪路を八丁計り山上に登ると、古い寺がある。乃ち末代山溫泉寺とて、今は特別保護の建造物、本尊の觀音は、天平時代の作で、今は國寶だ。寺の背後の一段高い所に多寶塔もある。其れと並んで地藏堂の中、また數多の古佛像が並ぶ。若しも此等の古佛像が、他の都會近い所にあれば、一とつでも大評判だが、僻地の悲しさ、無殘にも破れた地藏堂の中に、雨風に暴露されて御座る。

委しく覽たいが時間が無い。急いで山を下り、更に東公園といふ丘に登つて、圓山

川の上流から、下流の津居山港までを一望の下に眺め、俯して脚下の桃島湖上、鐵道建設の難工事を下瞰し、仰いで近く鞍掛山や、太白山が、深緑の若葉に包まれ、遠く來日ケ岳が、雲煙の間に隱見するを望みつゝ、更に走り下りて停車場に近い水明樓址といふを見る。地は城崎町の入口、圓山川の岸、山を負ふて水に臨み、老松五六株の下に、高さ五尺ばかりの苔蒸した石碑が立つ。開けば舊時此所に名高い酒樓があつて、柴栗山博士が最も其の風景を賞し、唐人の詩句を採て半夜水明樓と名け、自ら句を題した。松下の石碑が其れな相だ。が、惜い哉鐵道の爲に樓は取り毀されて、今は唯だ松と石碑が僅に昔時の面影を存するのみだ。

此所まで見て廻ると、最早發車に間が無い。匆々旅宿へ歸つて鞄を提げ、停車場へ駈け着け、汽車の中で汗を拭ふとき、早くも汽笛がピューと鳴た。

豐岡驛長の人力車斡旋

親切なる豐岡驛長は、余が爲に最も倔强なる二人の車夫を準備して待つた。

『此所から宮津まで十三里、賃錢に就て、特に警察署まで交渉して見ました。が、兵庫縣と京都府に跨がるので、管内ならば警察署に規定があるも、管外の事は分らぬ相です。で、車夫に尋ねましたが、此の間を人力車で通す者は滅多に無い。昨年の夏、西洋人が宮津から山を越して來たとき、二人曳で一臺六圓だつた相だが、其れでは高いから、四圓位で行れと、今も談判して居る所です』

停車場の車夫は、驛長の前には、勿論頭が上らぬ。が、二人で他管下まで往て、一泊した上に、歸りも多分空車であらうと云ふて、頭を搔きつゝ躊躇して居る。で、余は

『宜しいッ、二人五圓でやつて貰ひませう』

是で談判忽ち纏まつたが、豐岡から丹後街道が二線ある。一は、海岸線で、丹後の久美濱灣から、峰山町を通り、最後に樗峠を越て、天橋立の岩瀧に出る。他の一は但馬の出石町から、但丹兩國の境なる岩屋峠を越て、宮津へ行く相だ。余は出石町も

通り、樗峠にも登つて見たいので、終に先づ出石通りと定め、岩瀧を迂廻して樗峠にも登ることゝし、車を曳き出したのが午前十一時。驛長は尙ほも注意して、

『氣を附けて骨折れッ。後で無心などしては成らぬぞッ』

出石町の鶴の巣籠り

豐岡町は但馬第一の都會で、舊時は京極驛守一萬五千石の城下、大石良雄夫人の舅家石塚氏は、此所の藩士で、良雄は山科で僞りの放蕩を盡くし、夫人を此所へ預けて江戸へ下つたのだから、大石の書いた物は此地に數多あるといふ。が、今は其等を尋ねる暇も無く、市街を通り過ぎて、出石町まで三里の間、一路平坦一時間で着いた。

舊時は仙石隱岐守、三萬石の城下なる出石町は、北方の入口に但馬國一ノ宮の出石神社があると聞き、車夫に問へば、『彼所』と指さす。見れば、路の左方五丁計りの彼方、杉の杜が赤く幹のみ立つ。是は數月前に、神社が火を失ひ、天日槍を祀つた名高い國幣中社は、社殿皆な燒けて、境内の森林まで痛はしくも彼の通りと云ふのだ。車夫はまた更に右方に出石川を隔てゝ、一里ばかり彼方の山上、松の梢に白き點あるを指さし、彼れが名高い鶴山官林の鶴の巣で、去る明治三十八年から、毎年鶴が彼所へ巣を作りて雛を育て、今年も二羽の雛が居る。一昨年は雛を鷹に取られたが、其後も毎年來る。で、縣廳から保護して、今は彼の木に近い所に休憩所の茶屋が出來、何人でも往て見らるゝといふ。成程松の梢の鶴も、近傍の茶屋の屋根も能く見える。大石の住宅を、加古川本藏が訪ひ、尺八で鶴の巣籠りの曲を吹くのは芝居の忠臣藏だが、今は大石夫人の鄕里に近い所で、眞物の鶴の巣籠りが見らるゝも目出度い。

醫者となりまた繪師と爲る

出石町を過ぎて、先づ味山峠といふを空車曳かせて越え、山上の茶屋で、晝寢して居た媼さんを呼び起し、城崎から携へた辨當を喰べて、五錢の茶代を置くと、媼さん

は戸外まで出て禮を言ふた。

其所から東方に但馬の山奥は、途中で度々小學校の兒童が、恭しく御辭儀をするのは、田舍では不思議とも思はぬが、通り過てから彼等の一人が、同じ仲間に、

『今往たのは御醫者さんだらう。

成程此邊りで人力車を走らせるのは、大抵醫者ばかりと見ゆる。更に中山峠といふを越て、資母といふ村の茶屋に休み、車夫等が飯を喰べながら、頻りに樗峠や天橋立行の順路を尋ねると、其所に茶を呑で居た老人が、ツク〳〵と余が面を視て、

『先生は繪書きかね』

前に醫者と見られ、今は繪師と判斷せらる。是にて他國人の滅多に這入り來らぬ所なることが知れる。

更に岩屋峠といふ一里ばかりの山路を越すと、最早丹後で、今まで爪先上りと反對に、道路はひた下りに下る。

樗峠から橋立の遠望

山を下つて四辻といふ村に出れば、名の如く廣い道路が十字に通じ、東は宮津港、西は但馬、北は峰山町、南は丹波へ往來する要衝で、人力車の往來もポツ〳〵見えて、漸く都會の風が吹き始めた。

山田といふ村を過ぎ、弓木といふ村落に入ると、最早岩瀧の内海が深く入り込み、倉梯川の細流が、内海に注ぐ。其の近傍で道路は兩岐と爲り、内海の南岸、國道に隨ふて走れば、二里にして宮津港に達するのだが、其の岩瀧の内海と、宮津灣との間に、海の内外を區劃して、北方から長く突き出す長き洲が、所謂天の橋立である。其の絶景は、高所に登つて長洲を眺むる所にある。殊に横一文字の大觀は、岩瀧村の西北方、樗峠の山上から望むにあるといふので、余は其れを見る爲に、今日ワザと陸路を求たのだから、弓木村で、國道と分れ、内海の北岸なる岩瀧村に向つて進むと、困つた事

には道普請の爲に、七八丁の間、道路に輕便軌道を敷て土を運び、車は通行止だ。樗峠の登り口は、此の道普請の向ふ側なる、岩瀧の村外れにあるといふ。詮方無き儘、車を其所の民舍に託し、鞄と寫眞機を車夫に荷はせて、岩瀧村まで歩き、鞄は其所の百姓家に託し、直ぐに羊腸たる急坂を攀ぢ始めた。

此の樗峠は、宮津から橋立の長洲を渡つて、岩瀧村を過ぎ、峰山町へ通ずる縣道で、近頃新道が開かれ、山上まで十八丁、舊道なれば八丁といふ。余は當初但馬の豐岡町から、海岸線を來れば此所を過るので、二里許り近いさうだが、出石町が通つて見たい許りに、岩瀧村へ出てから故さらに跡戻りして樗峠に登る事となつたのだ。其の舊道は、雨水の浸蝕に任せて修繕せぬ故、藥研の底の樣なるも、車夫は物數寄に二人とも隨ひ、交はる〳〵寫眞機かたげて登る。途中で新道を横ぎり、愈〻絶頂に達すると、其所に茶屋がある。滿身の汗を拭ひつゝ、腰懸に據りて前方を眺め、覺えず一語、

『ナアール程之れは絶景だ。』

此所は岩瀧内海西方の山頂、海を眼下に瞰下し、其の内海の爲に故さらに築き出した突堤の如き一帶の長洲が、長さ一里、與謝の海一名宮津灣との間を區劃し、長洲には盡く青松茂り、天然の橋が横はるかとも見ゆれば、また蒼龍の游いで海を渡るかとも疑はれ、眞に是れ無類の壯觀である。是こそ日本三景の隨一なる天橋立だ。一に天橋とも云ふ。天橋に劃られたる内海は、恰かも湖水の如く陸地に圍まれ、左に岩瀧と江尻、右に須津等の漁村が、何れも水に瀕して簇がり、水面を漕ぐ舟は木の葉の如く、國道を往來する車馬は豆よりも小さい。更に眼を放てば、天橋の長洲南に靈きる所、水は小海峽を爲して海の内外に連なり、渡舟ありて頻りに其間を往來す。之を文殊の切戸と云ふ。切戸の南岸、高き屋根の見ゆるが智恩寺の文殊閣、其の東方半里ばかりに、黑く簇がる宮津市街の東方、起伏する山脈の背後が、舞鶴軍港である。

『旦那！腰を屈めて股の下から橋立を御覽なさい』

茶屋の亭主に斯く勸められ、尻を橋立に向け、股の下から眺むれば、光景更に一變

し、松は蓋く逆さまとなり、其の青き影を海面に映じて、宛ら波上に浮動するかと疑はれ、壯觀、美觀、絶大の眺め、何とも形容するを得ぬ。余は前年橋立に遊び、宮津から横に望み、また親しく長洲の松原をも逍遥したが、當時甚だしく景の奇を認めず、唯だ水邊に長き松原を見るのみと思ふたが、今此の絶勝を眺め、始めて古人が日本三景の一に選んだことの無理ならぬを知つた。で、携へたる寫眞機を立て、其の絶景を寫さんとすると、茶屋の亭主は慌たゞしく制止め、

『アヽ、モウシ〳〵、此所で寫眞撮たら大變々々。此所は舞鶴要塞地帶で、時々憲兵さんが廻つて來て、若し寫眞撮るのを見つけられたら縛られますぞえ。』

岩瀧内海水邊の一夜

山を下れば最早黄昏だ。元來岩瀧村から宮津港まで、一日六回小蒸汽船が往來するも、昨今揖じて往來を止め、また余が乘て來た人力車は、後方の村へ託してある。強て戻て其車で、内海の南岸を宮津へ往けば、日はトップリ暮れる上に、明朝橋立を見るには、再び戻らねばならぬ。ヨシ去らば、今夜は岩瀧に泊り明朝飽くまで橋立の景を賞*せんと斯く決心して岩瀧村の、水に臨んだ旅館兼料理店の松廼屋と

いふへ鞄を運ばせ、豎岡からの車夫は此所で還した。

旅館では家内總懸りで、急に大掃除して水に臨む別館の二階に通し。今まで床の間には、田口米作筆橋辨慶の幅が懸つて居たが、俄に懸け替へたのを見ると、大阪の新聞記者合作で、上に天橋に擬したるらしい一文字を曳き、下に書いた文字が『大内山上から望む天橋の景は、眞に天下一品なり、浩々歌客』とある。其他多く相知の人々が、歌や俳句や、英文まで取り交せて、酒間の落筆と覺しきが、前年此地へ遊んだときの作なりとぞ。樓主の談に由ると、宮津から橋立を廻り、成相山に登る眺めは、何人も多く賞するが、此の岩瀧まで來て、樗峠の絶景を賞する者は極めて稀で、殊に外國人などが、濫りに要塞地附近を撮影する懸念ある故、成る可く世間へ紹介せぬ樣になつて居るといふ。風景の爲には惜むべき事だ。

此夜獨坐内海に對すれば、遙かに天橋の松林が、一本づゝ黑く暮れて、内海名産の金太郎鰯を漁る小舟の火光が、暗中に明滅し、時時櫓を漕ぐ聲が、天地の寂寞を破るのみ。翌る朝は、空は先づ與謝灣から白み、次第に淡紅色となり、淡紫色と爲り、最後に金輪萬丈の光燄を發つて、天橋の松並木の上に躍り出るの眺め、到底宮津などの俗客多き所で望み得可らず。近き水の江の郷から、浦島太郎が釣竿荷ふて龍宮へ行たのも偶然で無いと思はる。

成相山から股覗きの橋立

天橋の絶景を横一文字に望む樗峠と相併んで、縱一文字の壯觀を望むのが成相山、是れは岩瀧村の東、江尻村なる國幣中社籠神社の背後から、山上まで急坂を八丁登つて、傘松の傍から眺むるのだ。

前年皇太子殿下山陰道行啓の日、此所まで登臨し給ひし所とて、急坂ながら道路は清潔に修められ、傘狀の松の傍、御休憩所の跡は茶店があり、此所に腰かけると、右は内海、左は與謝の海、其の中央を區劃して、一直線に對岸の山麓まで、例の翠松の天橋が、波上に浮動するかと疑はるゝばかりに連なり、殊に此所は、樗峠に比べて近

き故、松が一本づゝ鮮かに鑑別けられる。案内者の説明に依れば、天橋の向ふ側の南岸が文珠閣、其の東側が宮津町、内海の西北岸の漁村が、昨夜泊つた岩滝村、其の北方の山が樗峠、内海の南岸が須津村、脚下の籠神社の森林の間から、水に瀕する酒楼の見ゆるが江尻村、此の須津、岩滝、江尻を廻つて、文珠の小海峡を過ぎ、宮津までの間、一日六回汽船が往來するのだといふ。更に眸を遠く放ては、内海の西南遠く雲際に聳ゆるが丹波の大江山、酒顛童子は彼の山中に棲だ。また東南に與謝の海の彼方、舞鶴の方向に聳ゆるが由良ヶ岳、芝居で御馴染の由良港千軒長者の山莊大夫住宅址は、今も彼の山麓に在るといふ。

天橋の眺望は、例に依て股間から望むが最も奇だ。此所は宮津に近く、橋立に遊ぶ者は多く登り見る所とて、今も若い夫婦が茶屋に休んで、旦那は頻に股覗きを試み、

『やア奇妙々々、起て見たとは全然違ふ、お前もやつて御覽よ』

と、若い細君に勸むると、細君も内心はやつて見たいが、外見恥かしく、余が見て居るのを氣にするらしい故、余はワザと身を反け、案内の車夫に就て、後方の成相寺へ行く道程を聞て居る間に、夫人は手早く腰を屈め、裾を捲つて股の下から、チョッと覗いた。

頓てまた一群の遊覽客、寫眞機提げて登り來る。余は昨日の樗峠に懲りて、今日は機械を山下に殘したが、聞けば此所から舞鶴軍港は山陰で見えぬ故、撮影しても宜いのださうな。で、余は馬鹿らしくも羨に懲りて膾を吹いた。

縞の財布も宮津で無事

高所から遠く望めば、蒼龍渡海の壯觀を爲す天橋の絶景も、山を下つて其の松林の間を行けば、唯だ是れ左右に近く海を眺める長き松原で、長洲の幅は狹き所三十間、廣き所は六十間ばかり、砂白く松青き京都府の橋立公園だが、兵庫縣の舞子公園ほどの奇も無い。世には是だけの松原を見て、

『ナンダ詰らねイ、日本三景の隨一も無いものだ。』

と、大いに不平を言ふ結果、宮津で遊んで散々に騒ぎ、トウ〳〵縞の財布を空にし、『二度と行くまい丹後の宮津』など、歌ふて、愚痴をこぼすのは馬鹿の至りである。

が、橋立松林は斯く左右ともに海近くに在りながら、磯清水といふ井戸が、寸も鹽味無きが奇らしい。余はそれを賞して去り、文珠の小海峡を渡り、天橋山智恩寺に、文珠閣の古建築を視、『まだ文も見ず天の橋立』で御馴染の和泉式部の塔をも覗き、海岸十丁許り走て、宮津町へ着た。會〻正午近くに發する橋立丸が、二時間で舞鶴へ達する故、直ちに其の船上の客と爲り、縞の財布を空にする眞味は、終に之を知らず。

（明治四十三年）

北清事變中、皇帝雲麾中の北京皇城の内に入りて　水哉

民艸はふみあらされて九重の
庭にも茂る八重むぐら哉

天草洋の半日

雲耶山耶呉耶越、水天髣髴青一髮、と山陽外史が詠じけん、天草洋に泊するの詩句、古來普ねく人口に膾炙せられ、海天暮色の光景、目のあたり見る心地せらるゝものから、余も一たび其地に遊び、しかも天清く波穏かなる夕、大魚の波間に躍るを望み、大白星の月よりも明かなる實況を眺めばやと、待てば海路の小春日和、九州特別大演習の陪觀を了りて、熊本より三角港に出で、船にて長崎に赴くとき、偶然にも天草洋を航行する好機會に遭遇したるは、壬寅十一月十五日であつた。

三角から長崎までは、平生肥後汽船會社の二百噸ばかりなる小汽船が、毎夜十一時に三角を發して、翌朝七時に長崎に着くが例なるも、此日は幸ひに三菱會社の救難船大浦丸が、午後一時に纜を三角に解いて、長崎へは午後七時に著くのがある。大浦丸は、三菱社が日本近海に難破船あるとき救助する爲に、特に造りたる七百噸の汽船、

船體は堅牢で速力は早し。而かも蕉間の航行で、天氣は烟突の烟が眞っ直ぐに颱るといふ無風。空は拭ふが如くに霽れて、海面は鋭の如くに平らかだ。おまけに乘船賃までも、大演習の爲に二割引とは、嗚呼余は此日如何なる果報の天地に生れしぞ。

熊本から九州鐵道の三角行列車に乘れば、數日來熊本市を塡めん許りに雜沓したる遠近の老若男女は、今日　大元帥陛下の御發輦と共に四方に散じ、此の汽車も滿員にて、多くの乘客を熊本に殘し去りし混雜に、三角へ着いても長崎行の船客は數百人にて、三角停車場の軒下から本船まで通ふ廻船は、何れも人にて充滿し、一艘の本船に載せ切れぬかと危ぶみしも、流石は七百噸の客船、平氣なものにて、上等の船客室は、海軍々令部の依田海軍中佐、中野海軍少佐、參謀本部の森陸軍大尉の外は、長崎市の紳商五六人と余とのみ。

船室廣きも、此の好日和に誰か空しく籠居せん、各〻甲板に出で、籐椅子を占領し、徐ろに港灣の形勢を望めば、地は宇土半島の西南端を、天草島と相對し、八代海と有明浦と海峽を爲す所、三角市街は其所より三角の瀬戸を十數町隔つる山後に在れども、鐵道は其處まで通じかね、偖は此所の海岸を終端とし、其所をも三角と稱す。沖に碇泊する本船までは、輕舸にて往來するなり。周圍の四方は、半島と、登戸、千束、戸馳の諸島を繞らし、風浪の危險を知らず、熊本、八代、久留米、高瀬の各地より、汽車にて送り來る貨客は、此所にて汽船に載せ、鹿兒島、長崎、島原、口ノ津等の各地に送る。實にや此地は水陸輸送聯絡の要津、若し鐵道の今一と奮發して山を貫き三角港まで達せんには、二三千噸の汽船數隻を岸近くまで繫ぐべく、其便利更に幾層を加ふべしとぞ。

大浦丸は午後一時三角を發す。前方に近く山の横たはつて、路なきかと疑ひし三角海峽を過ぎ、三角港口に碇泊する大小船舶を右舷に眺めながら、漸やく進んで西方に漕ぎ出せば、溫泉嶽の右方、島原半島に聳えて、頂上に横はるは雲にやあらん、烟にやあらんと、双眼鏡を手にして望めば、島原、湊、有家、有馬等の蜃村漁落は、逶迤

として海岸に連なり、往時日本耶蘇教徒の根據地にて、德川氏全盛の時代にも、其徒が起した一揆に、九州一圓の大騷ぎをさせた所は彼の邊か、今は細紐一本を腰に纏ふて、東西兩半球を跋渉する女豪傑の產出地として名高い地は此邊かと、同船の海陸將校諸氏に且つ問ひ且つ質し、更に進んで口の津燈臺の前を過ぎ、天草島を左にして、遙かに長崎半島を前方の水天髣髴の中に望みつゝ天草洋に出づ。天草洋は一に千々岩灘と呼び、島原半島を東に、長崎半島を西にし、天草島を東南に望み、島原半島の南端、口ノ津の燈臺から長崎半島の南端樺島の燈臺まで海上十里の航程なり。

沖合既に七八里を漕ぎ出しと覺しき頃、忽ち見る背後より、一隻の水雷艇は、矢の如くに走り來り、擦り違ひて前方に出づ。蓋し三角から佐世保に赴くなり。偖も勇ましやと見送れば、早くも傾むき易き日の落ちかゝる邊に影を沒して、今は我船も烟を逢窓ならぬ烟突より、遙かに後方に横はらせ、漁舟の歸り來るもの、一隻又た一隻、遠くより次第に近くまで、暮靄の中に隱れ、樺島を廻つて半島の岬端を過るとき、山肩を覗いて一輪の滿月は、磨き出したる大圓鏡の如くに現はれ、初めは鷄卵の黃身よりも赤く、昇るに隨つて漸く白く、益〻昇つて益〻澄み、光を海上に投げて、舷側に迸しる波に映じ、數〻銀龍の泳ぐかと疑はしむ。指折り數へれば此日は陰曆十月の既望、東波が赤壁後遊の日だ。ア、愉絶——ア、快絶——偖も余は仕合の日に遭遇せしことよ。

岬角を廻つて野母崎の海岸望樓を月明りに見上ぐる頃から、前方の海中に、恰かも夏帽子を伏せたるが如き形せる無數の燈光、灼爍として輝き始む。軍艦の滿艦飾か。あらず。陸上の市街か、あらず。去りとて夜中の蜃氣樓にもあるまじと、之を中野海軍少佐に聞けば、是こそ有名なる端島の炭坑にて、近頃岩崎家が海中より石炭を採掘する大事業、最初は僅に中央の小高き部分のみの小島にて炭脈を發見し、後には周圍の海面を埋め立てゝ之を掘り、偖こそ在來の島は帽子の頭と爲り、埋立地は緣と爲り、併せて夏帽を海中に浮べたる形をなし、其所から地下五百尺を下りて、八方に海底を

掘り廣げ、晝夜不斷の工業に、無數の電燈は彼の如くに輝くと知り、轉た人間の力の廣大なるに驚きぬ。

端島を過ぎてまた有名なる高島炭坑、此れも海岸を埋めて採掘する工場、山下より山上まで電燈輝やけど、稍や老朽に近く、續いて中ノ島の炭坑も、同じく海岸ながら今は廢坑に屬すと聞く。斯かる沿岸著名の地を、甲板の上より指點しつゝ、船は漸やく長崎灣に入り、遙かに市街の燈光を前方に望み、三菱會社造船工場の燈影を、近く左舷に望むとき、船は暫らく進行を止む。是れは九州一圓に、先頃まで虎列拉病の流行したれば、檢疫を受くる爲だ。頓がて檢疫船來りて下等船客を甲板の上に整列せしめ、一と通り見しも、今は虎疫も撲滅後なれば、檢疫は名のみにて、一二等船客は船室を覗いた許りで濟み、船は再び進行を始めて市街の前面に進入す。

唯だ見る長崎市街の背後、三方に繞らす山々は、山腹より山上まで、幾千の燈火簇かり輝き、短きものは櫻花の如く、長きものは銀河の如く、上下左右に正しく列なるものは、都會の電柱の碍子の如く、壯觀名狀すべからず。偖も長崎市街は彼の通り山腹から山頂まで連なるか。それにしても夥多き燈光かなと怪しみつゝ、說明を聞けば道理なり。九州は今夏の虎列拉病で、盂蘭盆を延期し、盆祭で名高き長崎市も、此月まで延ばして、漸やく虎疫の撲滅を待ち、今十一月十三日より始めて盂蘭盆祭を執行し、四圍の山腹山頂なる寺々の墓地では、一昨日から祖先の魂祭りに、彼の通りの燈火を供へるなりとぞ。余は愈いよ此行の僥倖多きを悟り、右に左に、顧眄應接に暇無きとき、耳元に響く嘹喨たる樂隊、ホイ此れは何かと聞けば、港內碇泊の佛國軍艦で、今は晩餐の音樂を奏するのである。偖も偖もと、田舍漢が始めて東京見物に出てたる如く、見るもの聞くもの奇らしからぬは無く、短かき冬の半日を夢中に過ごし、船の既に港內に碇泊せしを覺えず。廻船が來ましたと促かされ、匆々上陸して、ア、愉快な航海であつたと獨語して、時計を檢すれば既に午後八時。（明治三十五年）

九州から四國へ

紅葉の時節門司へ上陸

『夏が來た、今年の暑中は何所へ遊ばうか』余は斯く考へる毎に、先づ念頭に浮ぶは九州東海岸と、四國の道後溫泉とを歷巡したる曾遊を思ひ出さぬことは無い。

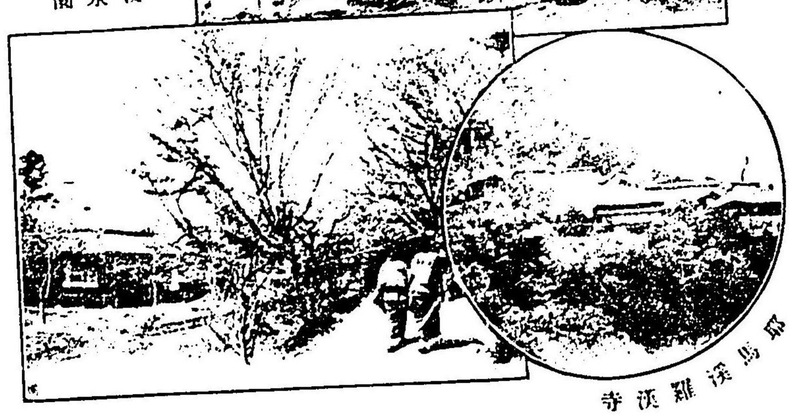
時は最早九年の前、露國は滿洲の撤兵期が過ぎても頑として其の兵を退けず、益〻增員する形勢を見て、我が抗議も次第に歩を進め、彼我兩國の關係は雲脚漸く急に、雨となるか霰となるか、形勢測り知られざるとき、余は琉球、臺灣から南淸を歷巡つて、門司へ歸着したのは明治三十六年十月中旬、九州名物の櫨紅葉が、燃え立つばかりに赤く染めて、野は唐紅ゐの錦を織る時であつた。

門司から九州鐵道の豐州線で、余は九州東海岸を南に走るのは、實に耶馬溪に紅葉

宇佐神宮

耶馬溪の青年の洞門

別府溫泉の砂湯



道後溫泉公園

耶馬溪羅漢寺

を賞せんとてだ。小倉市を汽車の窓から眺め、千壽製紙會社の工場から、熾んに黒烟を噴く烟突を指點しつゝ、行橋、新田原など驛名の甚だ奇なるに驚きながら、中津町に着いて旅館松風軒に泊る。耶馬溪の奇勝は、西方から中津近傍で海に注ぐ山國川の上流にあるのだ。始めて此の勝區を天下に紹介したる頼山陽が、山國川の名が俗だとて、山を耶馬の字に改めて溪流に冠し、耶馬の溪山天下に無しと賞讃したので、偖こそ海内無双の勝地として知らるゝに至つたので、恰かもサー、ウォーター、スコットが、一たび『湖上の美人』を詠じてから、蘇格蘭のカトリン湖が、世界に名高い勝地と爲つたと同じい。山水が文士の筆に負ふ所は至大である。

耶馬溪の奇勝一日の遊覽

翌る朝は、命じて脚の達者な車夫を選ませ、日の未だ昇らぬ前に、寫眞機抱へて乘ちんとして、不圖暗箱と三脚とを接續する螺旋が無いことを發見した。臺灣以來使は

ぬので、何所で失ふたか知れぬ。元來今日は一日で耶馬溪の羅漢寺まで五里の間を往來すべく、短かき秋の日の一刻千金にも代へ難い時間も、螺旋無では寫眞が撮れぬ。買ひ求めんにも旨く合ふ物が六ケしいので、急に車を或る鍛冶屋の前に着け、今起き出たばかりの主人に囑んで、即座に一個の螺旋を造らせ、其の間に一時間ほど空しく費やす焦思つたさ。立つたり居たりして待ち、出來るや否や直ちに走り出す。

中津町から豐田村を經、鶴居村で始めて山國川の岸に出た。此の邊りは風景未だ何の奇も無く、唯だ平野の間に水流れ道通ずるのみ。眞阪の茶屋に憩ふて、手斧立八幡社前の坂を越れば、樋田村の鮎返りから、始めて耶馬溪の奇勝に入る。此所は舊時巨巖流れに横はつて、急湍は瀑を爲し、名物の鮎も最早溯る能はず空しく下流へ歸ると、偖は鮎返りと名けた相だが、近年巨巖を碎いて急湍を緩めたから、鮎は平氣で上流へ溯り、鮎返りは名のみとなつたが、兩山左右に列つて、一水の急流其の間を走り、巖を嚙み石に激し、一歩は一歩よりも風景の奇を加ふ。

佛坂を越せば流れに沿ふて列なる筍を並べた樣な急峻なる山腹を穿つて隧道が通じ、古來之を青生の洞門と稱し、隧道の中は、川に向つて横に窓を開いて明りを採り、頗る冠りしたる馬子が、馬を曳きつゝ隧道を出入す。洞の間は十間餘り、通り過れば對岸に通ずる渡津あり、渡つて川向ふから眺むるに、彼の筍を並べた樣な山腹には、亂松逆まに垂れ、危巖の突起したる下には、急湍岸を嚙み、水色藍よりも青く、河身は皆な巨巖で、石に激する水聲は、瀧々と響いて傍人と語るも聞き取れぬほど聒しい。其の水を隔てゝ人馬が洞門を出入する樣は、正に一幅の活畫だ。

洞門を南に出れば、數丁にして東の谷より來り注ぐ東谷川に橋を架け、耶馬橋といふ。傍に數軒の茶店が旅館を兼ねて、遊賞の客を待ち、中に山國屋といふが最も瀟洒と見ゆる。其所に腰懸けて、豫め昼食の準備を命じ、車夫は車を其所に托し、更に羅漢寺に案内すべく、山急なればとて、靴を脱で草鞋に改む。

山國屋の傍から、東谷川に沿ふて行くこと凡そ一里、洞鳴橋の邊り、滿山盡く霜

に染めて、木々は淡紅濃黄の色々なる、宛から錦で包めるかと疑はる。橋を渡りて溪流に沿ひ、人家の後方から山を登る。是が羅漢寺の裘門で、仁王門から正面に昇るが不動坂、左方を登るが間道の捷徑だ。其の捷徑の峻坂を登れば、案内の車夫の脚は、斷えず余が頭上に在て、一歩一歩に流汗背に溢るゝも、巖角を踏み締め踏み締め攀ぢ登れば、眼界次第に廣く、進んで石橋に達す。石橋とは、山頂の峰と峰との間に、天然の巨巖が、大蛇の溪を渡るが如くに横はるのだ。幅は大約二尺ばかり、長さは五間位、橋とこそ言へ元より天然の巖、足の踏み場は高低均しからず、若し一歩を誤まれば數十仞の溪底に落ちて、身は粉碎を免れぬ。シカも是非とも其れを渡らねば羅漢寺へは行かれぬ。余は案内者の後に隨ひ、半ば起ち、半ば這ひ、辛くも渡り了つてホッと一息して腋の下から流るゝ汗を拭ひ、偖其の四方を眺むれば山は皆な石を肌膚として樹を衣と爲し、正に是れ峰容面々趁レ看殊、耶馬溪山天下無と、山陽翁が詠じた通り、山水の眺めは何とも名狀し難く美しい。

石橋を過ぎ、掌返しを廻れば、石の千佛地藏を安置する洞窟あり。次に山門を入れば更に大洞窟ありて、無漏窟と稱し、五百羅漢を安置す。天然の石で刻んだ羅漢像は、狀貌古、一として同じ姿せるは無く、個々生けるが如く、眞に彫工の妙を極む。羅漢寺の名は其れから出たのだ。身を轉じて羅漢の前なる巨巖の上に立ち、眸を放てば山下の溪底には、山國川と東谷川とに沿へる村落が、山と山との間に、此所に三軒、彼所に五軒、風情面白き茅葺屋根が散在し、溪に沿ふたる一條の道路は、右に左に屈曲して、殊に趣を添へるが、三脚の立て場が無くて、寫眞が出來ぬ。更に梯子を攀ぢて洞を潛れば、鐘樓あり。其の奥が本堂だ。寺は耆闍崛山羅漢寺として、北朝の光明帝の曆應元年の建立とある。茲に斷はつて置かねばならぬことは、南北朝正閏問題の囂しく研究せられたる後に、何故に北朝の年號を稱するかといふに、其頃此邊りは北朝の領地なりしとて、南朝の建武四年も、此所では北朝の年號で曆應元年と緣起に書てあるのだ。斯かる九州屈指の舊刹も、今は參詣の人稀に、石階苔蒸して、閑寂の

境、人間以外の別天地を爲す。

山を下つて再び青生の山國屋に歸れば、主の老婆は午餐の料にとて、燒きたる鮎を、旨煮にして待つ。時は最早午後一時を過ぎ、山上の跋渉で渇きたる喉は、麥酒で潤すに甘露の如く旨い。車夫にも一本飲せると、彼れも大いに元氣づき『旦那！　是から川上の三日月の池まで往きませう。十町其所らです。ナアニ遲くなつても日暮前には中津まで着きます』と。其れに勵まされて再び出發す。

またも耶馬橋を渡り、山國川の流れに沿ふて走ること七八丁で、曾木の長淵といふ所、溪流は靜止して五六丁の間、水色蒼然たる深潭を爲し、兩岸には高さ數丈の巨巖が、幾十百となく並び重なり、巖の上には能く數人を起臥せしむべき大さなるが多く、對岸の山は松又杉が森欝と茂つて、影を深潭の水面に映じ、眺望頗る佳い。二三枚撮影してから、更に上流に進むこと二三丁にして毛蕨神社の背後に小池がある。池の形が三日月に似て居るとて、三日月池と稱し、川の對岸には冠石といふ巨巖あり、耶馬溪八石の一だといふ。池は左ほどならねど、此の邊りは巨石甚だ多く、之を名づけたらば、八石や十石どころで無い。徐かに眺めんには、上流尙ほ十里の奥まで、本流と支流との溪といふ溪は、櫛來の耶馬溪と、新耶馬溪との何づれも、皆な此の通りだと聞き、飽くまで賞する時日なきを憾みつゝ、其所から車を返し、再び青生の洞門を過ぎ、中津の旅館に着けば日は既に暮れた。

宇佐神宮の大急ぎ參拜

翌る朝は中津を發し、またも汽車で宇佐に着く。鐵道は此所が終點だ。宇佐は伊勢の大廟に次で朝廷の最も重んじ給ふ官幣大社宇佐神宮の在る所、惟ふ昔、孝謙天皇の朝、和氣清麿公が遙かに此所まで派遣せられて、皇位を弓削道鏡に讓り給ふの可否に就て神勅を請ひ、堂々と其の不可を傳へて妖僧の肝膽を寒からしめ、能く萬世一系の皇統を傷つけさるを得たる靈地だ。何を措ても先づ神宮を參拜せねばならぬ。

驛を辭して車を走らせ、宇佐町を素通りにして、東に七八丁往けば、鐵の大華表がある。其れを潜れば流れに架するを呉橋と名け、橋を渡れば宏壯なる樓門を西樓門又は仁王門と呼ぶ。門内の仁王は、運慶の作といふ。此の門から内が神苑で、其所には旅館や商店の出店が軒を並べ、名物の宇佐飴や朝鮮飴を鬻ぐも、余は見向もせず、乘つた車は門側の茶店に托し、車夫を案内として入れば、二三百歩で菱形の池の中島に、護王神社として祀らるゝは、此所には無かる可らざる和氣清麿公を祭つたのだ。池の傍を少しく進みて左に折れ、二三十歩に皇族下馬と大書したる札を立つ。下宮を右に見て、石段を二百級ばかり登れば一の華表、次に西大門を潜れば上宮、社殿は東西中の三殿並び、西を一の御殿とて應神天皇、中を二の御殿とて比咩大神、東を三の御殿とて神功皇后を祭る。境内は古木森々として茂り、一たび足を瑞籬の内に入るれば、心自ら澄み、彷彿たる神靈を眼前に拜する心地す。宜なる哉古來天皇御即位のとき、又は國家に大事變災あるときには、必ず使を此の神宮に派遣して奉告し給ふを例とし、之を宇佐使と稱し、御即位の奉告は、一代一度の奉幣と稱すといふ。偖また上宮鎮座の地は、小椋山または鵜山と云ひ、大尾山、西山と並び峙ちて菱形を爲せるより、三山を併せて菱形山とも稱び、其れに因りて山麓の神池を菱形池とも呼ぶとぞ。

日出町に稀世の大蘇鐵

宇佐を辭して車を國道に走らせ、南方七里にして日出町に達すれば、また海岸に出づ。豐後灣の北岸で、九州沿海航行の汽船が朝夕發着する所、舊時は日出藩主木下氏が二萬五千石の城下な相だ。舊城址は市街の南端にあるも、惜い哉今は皆な取り壊されたが、此町に天下に誇る可き松屋寺の大蘇鐵があると聞き、山村といふ旅館に憩んで午餐を了してから見に行く。

寺は曹洞宗で康德山松屋寺と稱し、名高い蘇鐵は二株で、枝上また枝を生じて、大蛇の蟠まるが如く、泉州堺の妙國寺の大蘇鐵、駿河の興津の龍華寺の大蘇鐵と並んで、

日本の三大蘇鐵と呼ばれたもので、明治の初年に寺が火災で燒けたとき、蘇鐵も半分は燒けて枯れた相だが、其れでも今尙ほ五間四方位に廣がつて、稀に見る壯觀だ。

日出から豐後灣の海を左に眺めつゝ、海岸を走ること二里にして豐岡町、更に三里にして別府溫泉に着く。

別府溫泉に地獄の泉源

此所は豐後國速見郡、溫泉で名高い別府町、三面に山を負ふて一面海に臨み、朝見川の細き流れを境として濱脇溫泉の市街と連なり、冬は暖くて夏涼しく、殊に其の周圍四五里の間には、十數所の溫泉ありて、到る所浴客群がり、別府町から大分縣廳所在地の大分町までは、三里の間に電車も通じ、また中國西國通ひの汽船は、朝夕出入を斷たざる故、往來交通極めて便利なれば、別府は宛ら大分圣縣下の公園として、また近畿、中國、四國、九州を通じて、最も名高い遊賞地である。其の地の旅館米屋しいふに投ず。

別府の町、一千六百餘戸の中に、旅館の數は大小百五十餘戸、家として溫泉の備へ無きは無く、土を掘れば湯は何所からも涌き、殊に奇らしきは海濱の砂の中からも、海中の水底からも涌くので、此地の名物に砂湯とて、夏季には海岸の砂原で、無數の浴客が、小兒の戯るゝ樣に砂搔き掘つて窪めた孔へ半身を埋めて寢ころび、姫御前達は頭の邊りへ洋傘展げて太陽を覆ひ、白妙の乳から上のみ露はしたる者の夥多きは、他に例の無い珍畫題である。不幸にも今は秋の末で、余は砂湯の奇觀は、僅に寫眞と、繪葉書と、樓婢の說明とに由て知るのみなるぞ憾みなる。

『旦那樣、今頃砂湯はありませんが、養氣園と不老泉へは是非往て御覽なさい』と樓婢の勸めに隨ひ、本町の西法寺角から西に折れると、二丁餘りにて養氣園といふがある。大弓、楊弓、室內射的などの遊戯場を設け、輕便の料理をも調進する所なれば相だが、余等都人士には何の奇も無い。更に去て二三歩西に進めば、三層樓の大厦巍然

として高く聳ゆるのが、是ぞ別府町民が溫泉場改良の第一着手として、新築したる大浴場の不老泉で、規模宏大、建築壯麗、伊豫の道後溫泉の振鷺閣と並んで、全國浴場の兩大關と稱せらる。試みに入て浴するに、浴槽は特等、上等、並等の三種で、別に飲湯、髮洗湯、溫度調和所、湯瀧などの設けもあり。特等は一人入浴し了る毎に、總て湯を流し去て、更に溫度調和所から、見る間に溫熱好い加減の湯が補充されるのだから、湯の中には一點の汚濁れも無く、玲瓏玉の如く底が透き透つて見ゆる。浴室は地盤から高さ七間餘、二階三階とも各七十五坪の廣い室は、特等と上等との浴客休憩場、其の外は二階建の事務所、湯瀧と附屬家屋まで合せて七棟ある。浴後其の三階の特等室に登れば、四方眺望廣く、東は煙波天を涵す硫黄三十六洋の波間に、白きは風を孕ひ眞帆片帆、鷗の飛ぶとも見え、黑きは烟を吐く汽船、海蛇の泳ぐかとぞ眺めらる。南西には筑紫富士の由布山と鶴見山とが高く蒼空に峙ち、朝見の杜、乙原の村落、さては朝見川、濱脇町は近く脚下に連なる。更に西北を望めば、堀田、觀海寺、明礬等の溫泉、鶴見村、石垣村の曠野から、先刻過ぎたる日出、豐岡の港灣市街まで、皆な一々指點せらる。

翌る日は人力車で北の方、濱湯、柴石、海地獄、明礬の各溫泉を巡つて坊主地獄を見る。海地獄と坊主地獄とは溫泉の泉源が、池中に高さ一尺餘り沸き返り、宛ら繪で見る地獄の釜の樣であるに肝を冷さる。轉じて鐵輪溫泉に赴けば、其所にはまた山間ながらも驚くべき壯大な旅館があつて、建築だけをも見物せしむる相だが、マサかに見物だけも氣が利かず、入浴せんには時間無れば、空しく車を別府町に返す。

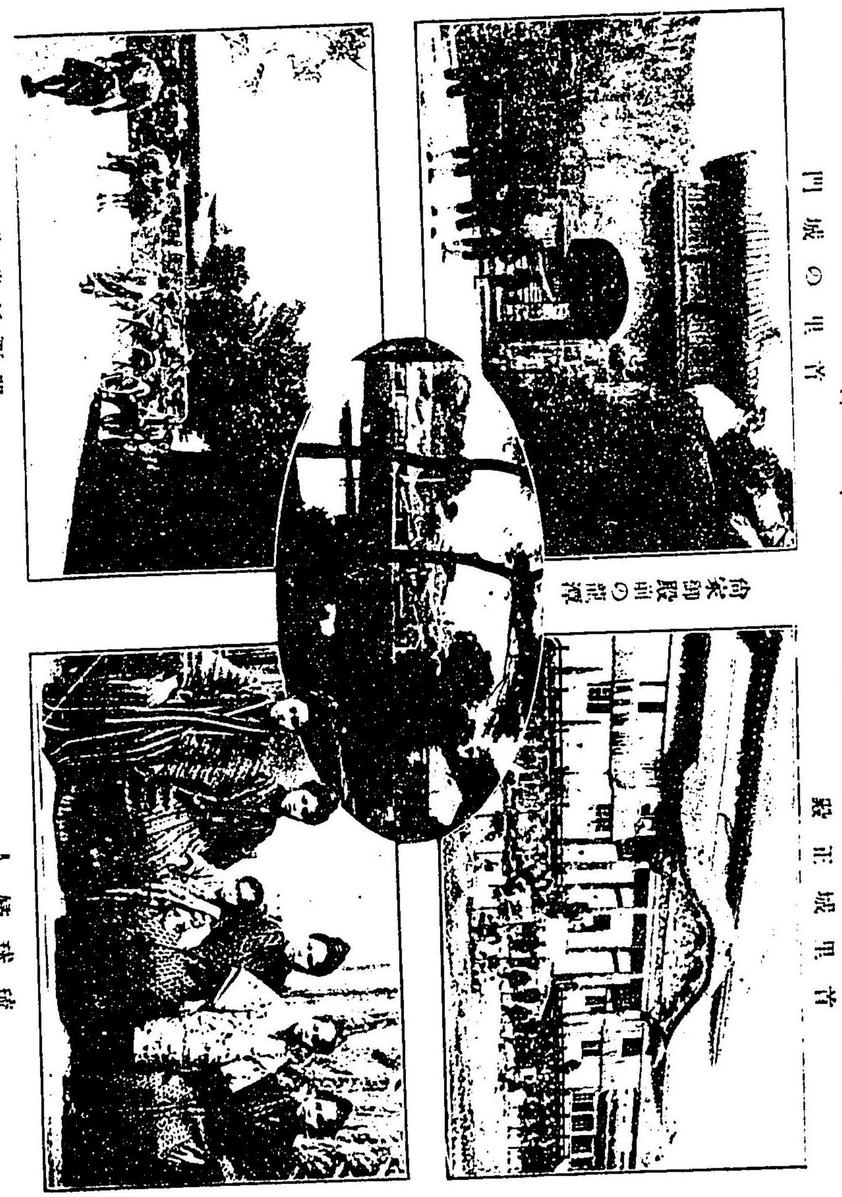
其の翌る日は、電車で大分町に遊ぶ。線路は海岸の浪打際を走つて、大分町に近づけば、函營の海の大分港には、和洋いろ〳〵の船の出入る眺め甚だ賑かだ。大分市街は縣廳所在地としては、他の福岡や熊本に比べては劣るも、縣廳は舊時の府内城の内に在て、周圍の城壁が、石垣の上に城樓を存し、舊時の面影を偲ばるゝが嬉しい。去て春日公園に出れば、海に臨んで松林の中に在り。園内は春日神社、逢萊丘、賢女之碑

などあり、また蓬萊館といふ酒樓もあり。午餐の爲に入れば、門に大なる紙の看板を掲げ、法學博士鳩山和夫君歓迎會場と大書し、宴會は此の日の午後で、他の客は一切謝絶するといふも、強て片隅の小座敷に入り、午餐を了して直ちに別府に歸る。

別府から伊豫の美津ケ濱港に赴かんとて、夜の十時頃汽船に乘れば、一等室には、偶然にも鳩山君と他に一人の外國人と余との三人ぎりで、『イヤ此れは意外な所で御目にかゝります』。と鳩山君と語りながら、船が進行を始めてから、他の外人とも話しを交へると、此の人は露國公使館書記官某氏なさうだ。日露間の風雲急なる時節に、此の邊りで此人に遭ふのは、妙だと思ひつゝ疲れて眠る。

道後温泉で露探の嫌疑

眼を覺せば翌る朝は、最早美津ケ濱港、鳩山君は其船でまた安藝の宇品へ赴くとて上陸せず、余は道後温泉に遊ばんとて上陸すると、彼の露國人もまた上陸した。其頃



三笠の甲板　琉球　琉球城址　街路通初期　人絹琉球

は凡そ外國人と見れば盡く探偵が追跡する時節とて、早くも數人の密偵が隨ひ、余までも怪しむ樣子だから、余は港に近い巡査派出所で、先づ彼の外國人の素性を告げ、併せて余が名刺も渡した。で、余が嫌疑は晴れたらしいが、露西亞人と聞たる警察官は、眼を圓くして驚き、直ぐに數人の角袖巡査が隨行す。露國人は、美津ケ濱から松山市の古町驛まで、汽車中に居たが、古町で汽車を乘り換へ、余が道後行の汽車を待つ間に、二人曳の人力車で道後へ向ふと、角袖もまた二人曳で駈け出した。

道後溫泉の鮒屋旅館へ着き、今日外國人の客は來ぬかと聞けば、先刻見えて二階に登り、湯に入つてから今浴衣に着替て、休息中と云ふ。無論角袖巡査は次の室に居たであらう。余は用無れば尋ねもせず、一浴してから寫眞機かたげて出づ。

抑〻道後溫泉と云へば、景行天皇以來、數〻天子の行幸ありし古跡で、全國の溫泉番附では、東の草津、熱海などゝ相對し、横綱大關の位地にある。溫泉の分量多からず、旅館に內湯無く、何人も町の中央の振鷺閣といふ共同大浴場に赴くのだ。共

同浴場といふも、其中は特等と一等から五等までに區別せられ、別府の不老泉と相似たる壯大な建築で、特等室には一室買切りの一浴毎に湯を改める仕組もある。其の浴槽は、自然石を削つて槽と爲し、傍の大石の間から溫泉を注ぎ下し、上に石造の大黑天を安んず。湯に入る前に、三階の休憩所で衣服を脱ぐと、若い湯女が悉皆預り、引替に番號の附た眞鍮製の指輪と浴衣とを交附す。成程湯の中でも肌身離さぬ合札に、番號附の指輪とは面白い趣向だ。再び湯から出て其所へ戻れば、預りたる衣服を渡し櫻の花湯を汲で出す。若し命ずればラムネ・麥酒・日本酒類、何でも立どころに運ぶ

浴場を振鷺閣と名けたは、屋上に金色燦めく大なる鷺が翼を展げて立つからで、是は、往昔溫泉が未だ發見せられざりしとき、何所からか負傷したる一羽の鷺が飛び來り、日々に此所の水に浴し、數日後に全治して去たので、不思議に思ふて熟視したるに、水と思ひしは溫泉で、實に鷺の知らせで發見せられたから、鷺を記念として偖こそ振鷺閣が出來たのなさうだ。

浴後の余は、人力車で寫眞機提げ、一里を隔つる松山市へ遊び、名高い加藤左馬介嘉明が築いた松山城が、今も依然城樓から天守閣の存するを近寄つて撮影せんとすると、突然巡査に叱られて、『此所は旅團司令部の在る所と知らぬか、全體足下は何者だ』との尋問に、驚いて太陽記者の名刺を出すと、今度は穩かに制止せられ、撮影を止めて再び道後の宿へ歸れば、最早彼の露國人は出發した後であつた。

余は其夜道後に泊り、翌る日は宇品へ渡り、更に山陽と山陰の各地に一週間ばかり遊んで東京へ歸ると、友人から、『君は此の新聞を視たか』と示さるゝを見れば、東京の某新聞が、麗々しく二號活字で、露探の嫌疑者と題して、去る頃九州より四國へ露西亞人と同行して巡つた二人の日本人がある。其一人は法學博士鳩山和夫、他の一人は博文館の坪谷善四郎とある。

後に聞けば、其事に就て警視廳から愛媛縣の警察へも數回問合せ、偶然の同行者と知れて漸く余等は無事なるを得たのな相だ。（明治三十六年）

琉球の舊王城

千島の北端より臺灣の南端に至る、我が帝國の版圖は、南北一千二百里に亘り、全國到る所、封建時代の名殘を留め、古城廢墟の殘存するもの千を以て數へ、人をして徐ろに昔を偲ばしむる中に於て、南面して王と稱したる宮殿を求むれば、唯だ一の琉球島に首里城あるのみ。抑も神武帝の大八洲を統一して、萬世の大業を建て給ひし以來、二千六百年の歴史は　時に領土を大陸に擴めたることあるも、久しからずしてまた失ひ、方今大八洲以外に、古來領有したるものを擧れば、北海道、沖繩縣、及臺灣のみ。北海道は蝦夷の土蠻を征服し、千島は露西亞と樺太を以て交換し、臺灣は清國より割讓せられたるものゝみ。故に一王國の總てを收めて我が版圖に屬したるものを求むれば、唯だ沖繩縣の琉球あるのみ。其の三十六島、四十萬の人口を有し、規模小と雖も一君主を戴きたる所、帝國の彊域内に在ては珍とするに足る。余は今琉球に遊び、半日を舊王宮内に消せり。請ふ微しく見聞する所を語らん哉。

琉球の舊王城首里は、今より六百餘年前、同島統一の主、舜天王以來、近く明治十二年に、始めて琉球藩を廢して沖繩縣を置かれたる日まで、斷えず王宮の在りし所、其間王統は數しば交迭するも、國都を遷したること無し。舜天王は實に我が鎮西八郎爲朝の子なり。爲朝八丈島の配所より、部下の兵を率ゐて南に進み、方今琉球本島の國頭郡に屬する運天港に漂着し、勇武能く島民を懷け、同島の一諸侯大里なる按司の女婿と爲り、其間に生れたる子の尊敦は、後に國亂を平定して首里に入り、王位に登りて舜天と稱し、都を中山と名けたること、同島現存の事蹟多く之れを證す。當時爲朝の敎へたる我が假名文字は、今に傳はり、舜天王以降は、記錄の尋ぬべきものあるも、其の以前の事は、文獻の徵すべきもの無し。然ども首里の王城は、尙ほ遙かに其の以前より存したるや明かなり。是れ琉球本島は、群島中最も大にして、首里はまた本島中最も形勝の位地を占め、王城として最も適當なるを以てなり。方今沖繩縣廳は、

那覇港に置かれ、那覇は全島第一の繁華を占むるも、是れ交通の便なるが爲にて、要害の利を求むれば、那覇より二里を離れ、而かも那覇を眼下に望む首里城に勝る無し。

既に舜天王以後、日本人の血統を以て之を治む。而して其地は我が薩摩の屬島なる大島、永良部、與論等の諸島と相隣りす。其の人種と風俗とは、内地と大に異なるも、大島群島とは大差なし。故に彼我の往來漸く多く、小島中また幾たびも内亂あり。嘉吉年間將軍足利義教は、此島を薩摩の守護島津忠國に與へて、其の屬國と爲せり。然ども我足利氏の末世には、全國を擧げて群雄割據の戰國と化し、海内鼎沸してまた威令の琉球に及ぶなく、同島は我への朝貢を絶つ。既にして織田、豐臣の諸氏、漸次更迭して、世は德川氏に政權を歸し、海内平定するや、慶長十一年九月、島津家久は、使を琉球に遣はして朝貢を促がすも、彼れ明國を憚かりて應ぜざる故、偖は幕府に琉球を征せんことを請ひ、許さる。家久乃ち兵備を收め、慶長十四年二月十一日、兵船一百餘艘、精兵三千餘を發し、其重臣樺山久高、平田增宗等をして鹿兒島を進發せしむ。其兵は先づ大島に赴き、德島を征服し、四月朔日進んで琉球本島の那覇に上陸す。中山王兵を發して防戰するも、散々に擊破し、三日中山に入り、國王尙寧を擒にし、同月二十九日薩摩に凱旋す。幕府は其功を賞し、七月十日改めて琉球全島の稅額を十二萬石餘と定め、之を島津家久に賜ふ。翌慶長十五年八月、家久は中山王尙寧を伴ふて先づ駿河に到り、前將軍家康に謁し、琉球國を賜はりしことを謝し、同月二十八日更に江戸に到り、將軍秀忠に謁す。是より後、琉球は永く島津氏の附屬と爲り、年々貢物を鹿兒島に納めしむ。當時中山王の江戸に伴はるゝや、琉球島民は、明國に請ひ、其の力を假り、幕府及島津氏に請ふて、中山王は本國に還るを得たり。

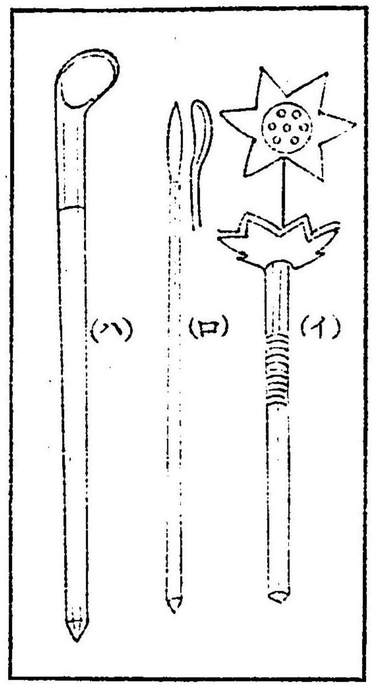
島津氏征服後、琉球は一面島津氏に屬すと雖も　また一面は明國に通じて其の隷屬と爲り、既にして明朝亡びて清朝代り立つに及び、益〻清朝に依賴し、清朝の年號を稱し、國王の承位あるごとに、清朝は冊封使を派遣して、琉球國中山王に封ずるの書を授く。而かも一面には、承位あるごとに琉球より正副の使節を江戸に派遣し、襲封の

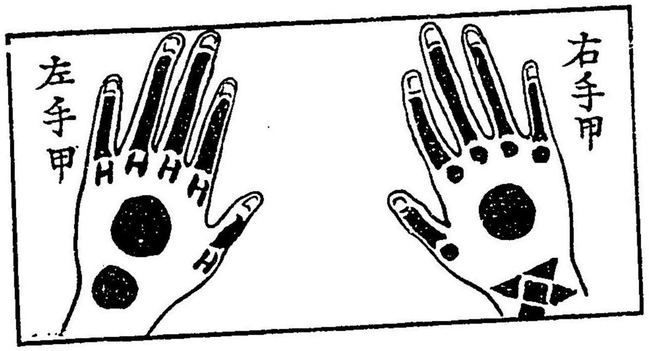
恩を謝するを例とす。故に琉球は日清兩國に屬し、兩大國の何れにも專屬せざる爲に、僅に其の存立を全たくして、近時に及びたるなり。

琉球國最後の中山王を尙泰と爲す。尙寧以後第九世、舜天王以後第十九代の主なり。王は我が天保十五年に生れ、嘉永元年僅に六歳にして父王尙育薨去せしかば、王位を嗣ぎ、明治十二年琉球藩を廢せらるゝまで其位に在り。明治四年、內地には廢藩置縣を決行せらるゝや、琉球を以て鹿兒島縣管下に屬し、五年正月、縣廳は、奈良原幸五郎、伊知地貞馨の二人を派遣して大政維新の旨を傳へ、島制改革の事を慫慂す。尙泰乃ち同年七月王子尙健を正使とし、副使と共に東京に到り、今上陛下の御親政を賀せしむ。時に尙泰を改めて琉球藩王に封じ、華族に列し、藩邸を富士見町に賜はり、藩內融通の爲に金銀紙幣を併せて三萬圓の恩賜ありき。明治政府の下、琉球の明かに日本帝國領土と定まれるは此時に在り。會たま琉球島民の臺灣島に漂流し、土蕃の爲に慘殺せらるゝものあり。我國乃ち兵を臺灣に出して土蕃を征し、清國より償金を收めて琉球島民の被害者を救恤す。此時より琉球藩を以て內務省に直轄し、藩債二十萬圓を政府の負擔と爲し、特に命を下し、藩王上京の事、明治の年號を奉ずる事、刑法施行の事、內地官吏赴任の事、敎育普及の爲に少年等を東京に留學せしむる事の五項を實行せしむ。國王命を奉ずるも、島民は未だ其れを實行せず。八年我政府また島民保護の爲に熊本鎭臺分營を首里に設け、同年以後十一年までの間、內務大丞松田道之は三たび首里に赴きて新政を施こし、漸く琉球藩を廢し、沖繩縣を置く。然ども國王の上京は尙ほ未だ決せず。越て十三年に至り、舊藩王尙泰始めて意を決し、世子尙典と共に、熊本鎭臺兵に護衞せられ、住み慣れたる首里の舊王宮を出でられたるは、五月廿七日なり。當時舊藩臣は、國王日本に擒にせらると誤り信じ、窃に清國に赴きて回復を謀る者多かりしが、尙泰の一行は、東京に着して參內し、從三位に叙せられ、麝香間祗候に補し、東京在住仰付られ、金祿公債證書二十萬圓の恩賜ありき。而かも、頑冥の島民は、未だ聖旨を解せず、近くは明治二十七八年の戰役により、清國に

依頼するの望なきを悟るまでは、尚ほ首里城を以て中山王宮と爲すの昔を慕へるこそ愚かなれ。

藩王去て後の首里城は、城壁庭苑總て荒るゝに任せ、また舊時の觀無しと雖も、流石に六百餘年間の王都、詩人の腸を斷たしむべきもの多し。今大阪商船會社の琉球臺灣航路汽船に乘り、那覇に錨を投ずるを待ち、上陸する所は那覇の市街、住民の十中八九は土人ながら、既に久く沖繩縣廳の所在地とて、内地人の旅館料理店等多く、遊賞の客をして滯在に不便を感せざらしむ。此所より首里の舊王城まで、一里有半、人力車甚だ多く、片道八錢許を普通とし、珊瑚礁より成れる道路は、





セメントを以て固めたる如し。

此の島民の風俗は、男女とも髪を結び、笄を頭上に挿み、男は圖の如き「イ」を下より「ロ」を上より挿し、女は皆な「ハ」を用ひ、髪を左右に傾く。常に芭蕉布の帷子を着、帶を纏はず。何れも跣足にて、貨物を頭上に載せ、甲に文身したる手にて支へつゝ道を行く。概して男は遊び暮して女のみ勞働する樣、殊に目立ちて見ゆ。路傍の家は、暴風を防ぐ爲に簷甚だ低く、皆な平家にて、瓦の屋根に厚く漆喰を塗り、周圍に煉塀を繞らし、宛から小城廓の觀あり。庭には多く芭蕉を植ゑ、椰子、榕樹、龍舌蘭など、眼に入る植物は總て内地に異なり。殊に奇なるは墳墓の制なり。周圍は漆喰を以て固め、宛然倉庫の如し。動物には鳶鴉の横に穴を穿ちて扉を設け、

飛ぶ無く、鴻雁の翔る無く、唯だ豚のみ蠢々として家々の軒端に群がる。正に是れ伊知地貞馨の琉球雑詠に、

眼中風物異ニ東洲一、正是蜻蛉洲盡頭、全島人家三萬戸、各村蕉樹幾千畴、烏鴉無レ影中山地、鴻雁不レ賓南海秋、一望宛爲倉庫看、墳塋累々滿ニ郊邱一、

の句、能く實際を穿てり。更に進んで首里城に到る間、矚目する處は、

蔗圃芋畦數十程、林風吹滿葛衣輕、蒼松高表舜天廟、粉壁遙連首里城、草木四時抽ニ綠葉一、田家六月穫ニ黄秔一、欲下探ニ奇勝一供ニ詩料一、峻阪崎嶇不レ易レ行、

の五十六字略ぼ盡せり。

漸く爪先上りの阪路を登りて、中山門に至り、後方を顧れば、那覇の市街と港内の船舶とは更なり、近く山下に散在する村落も指顧の下に在り。村落の家々は、多くは、茅茨伐らざる土階三等の矮屋、今來りし路傍に見るが如く雅致あるもの少なし。中山門の内は、首里の市街、丘上陵腹、屋舍櫛比し、舊藩の名門舊族多く此所に住む。

五千の人家、三萬五千餘の人口、方一里許の間に簇がり、島尻郡中、別に首里區と稱して、區役所之を管す。中學校、師範學校、警察署、第六師團分遣隊等此にあり。舊藩王尚家の邸は、龍潭と名くる池畔の丘上に構へられ、全市街を下瞰して、最も形勝の地を占む。

舊王城は、中山門を入りて正しく登れば、最高所に在り。丘陵を鏟りて上を平らげ、外廓の下、螭石を疊みて城壁と爲す。遠く望めば髑髏を積めるが如し。城の四面に四門を設け、西に面する正門を歡會門と稱し、内に入れば石階を設け、階段の上に一門あり、西北に向ふ、之を瑞泉門と稱す。是れ階段の下に清泉湧き、源暑にも涸れず、混々噴出し、末は流れて龍潭の池に注ぐより名く。瑞泉門を入り、更に進めば西に面して樓門あり。榜して刻漏といふ。是れ樓上に漏水器を備へ、舊時は時計の用に供したるに由る。更に進めばまた門あり、西北に面す。榜して慶福門といふ。門を入れば乃ち王宮なり。左右また二門あり。淑順、美福と名く。城の周圍九町、面積約一

萬九千坪あり。舊王宮は久しく沖繩縣臨時土地整理局を置かれ、五六百の吏員、日々簿書堆かき裡に鞅掌す。

慶福門の内に入れば、正殿の構造は、南北八楹、殿下の階段三條に分れ、中階七級、石欄を繞らし、花鳥を彫刻す。殿上に樓あり、之を御書樓と名け、清國歴代天子の揮毫に成る扁額を懸く。その下は國王政を聽きし所、階前の庭は、廣さ數十畝、砌を三道に分ち　方磚を敷く。正殿の左右に廂ありて庭を圍む。左廂は北向し、南樓と名け、右廂は南向し、北宮といふ。北宮は清國の冊封使及び島津氏の使節の來り臨む所、而して兩國の使節同時に來り臨むときは、暫らく島津氏の使節を他に置き、清國使節には之を秘せりといふ。以て琉球が兩大國間に附屬し、左袒右訣して僅に國の存立を圖りし隋態を想見すべし。

王宮の後ろなる庭苑は、荒れたりと雖も、尚ほ樹石亭榭依然として存し、中には蘇鐵のみを多く集めたる邊り殊に奇なり。庭中の最高所、絶壁の上に小亭を設く。登臨すれば、北は那覇港より、南は與那原の海岸まで、全島の兩岸を前後に眺め、遠村近落蒼とく一眸の下に集まる。歩を旋して再び慶福門を出で、歡會門を辭して去れば、圓覺寺、天王寺、天界寺等の寺院は、王城の外に散在し、歴代の王と王妃との陵墓は、多く天界寺に在り。圓覺寺は規模最も大に、中央を佛堂とし、左右に尚家歴代の靈牌を祀る。門前の池を圓鑑池と名け、池中の島に天女祠を安んじ、石橋を架し、古雅掬すべし。池水は龍潭に通じ、池中に蓮多く、花時の眺め頗る佳なりといふ。

畢竟首里の舊王城、其の全境の規模は、我が京都奈良等に比ぶれば甚だ小なるも、建築古く、境の靜かなること、内地の舊城址に於て比類を見ず。況や各種の動植物、男女の風俗まで、全く其の觀を異にし、一種の博物館と公園とを兼ぬ。之を沖繩縣の公園と爲し、將來臺灣航海の汽船を毎月數回此島に寄港せしめば、臺灣往來の旅客をして、併せて此の古雅珍奇なる風物を併せ賞せしむるを得べし。是れ特り遊覽者の目を樂しましむるのみならず、また琉球島の拓殖に裨益すること大ならん。近頃まで舊

山水行脚

王宮は、沖縄縣の臨時土地整理局に充てたるも、其の事業も既に功を了へりと聞けば、宮殿と庭園とを擧げて、公衆遊覽の地と爲すこと、實に最も妙なるべし。（明治三十六年）

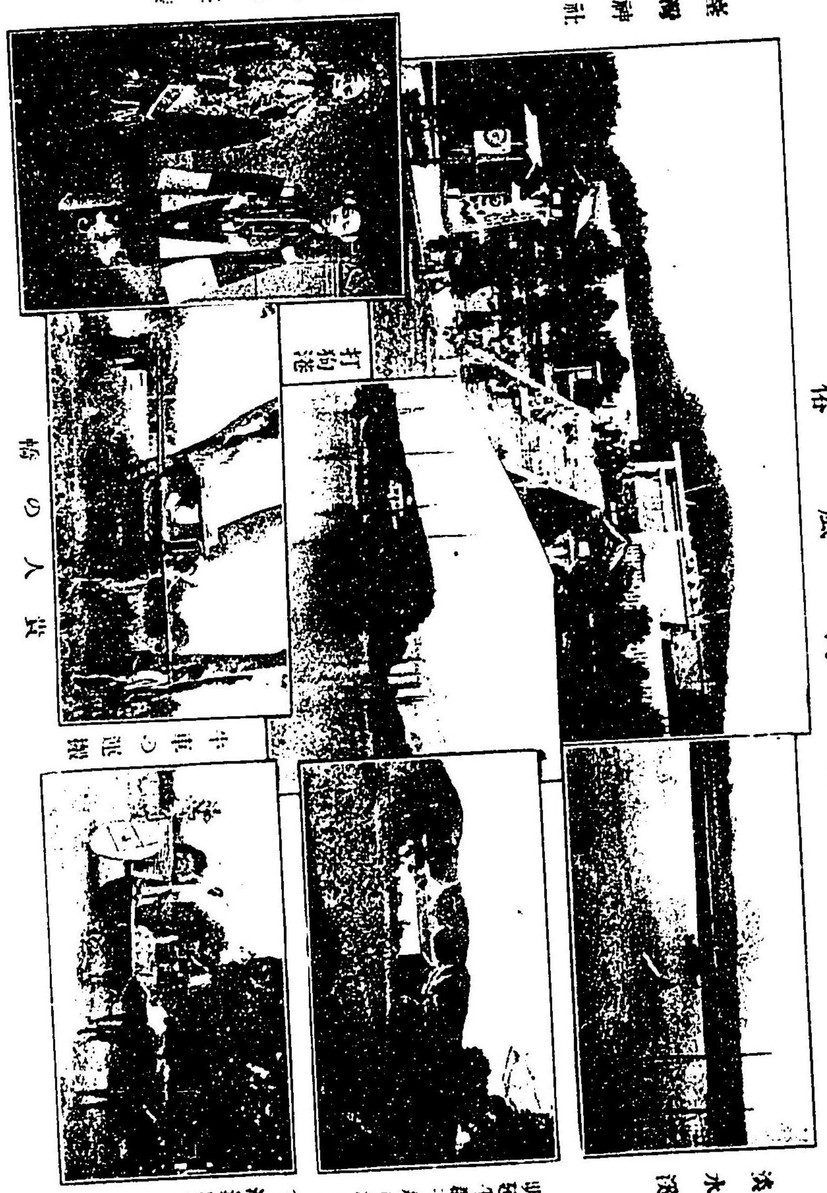
亡き孫を悼む

去年五月三日に生れて、直ちに風薫る端午の節句を祝ひし初孫を、文太郎と名け、頗る健かに育ちて、今年の夏には最早家の内を這ひ廻り、前歯四五本生え始めたる口元より、片言交りに語りて、祖父の膝に縋りつゝ、髭に戯むるほどとなり、掌の中の珠と愛で、家庭の花と樂しみしも夢なれや。情無の疾の惡魔は、此の可憐の神の子を覬ひ、梅雨降りしきる七月五日、醫科大學の病室に殁して、忽ち盂蘭盆の新しき精靈と化しぬ。雨に溢るゝ三途の川、誰が背に負はれて越すやらん。照る日に暑き死出の山、誰が手に引かれて攀ぢやせん。思ひれば斷腸の念禁じ難し。唯だ佛の慈しみを賴みとして、力泣く〳〵野邊に送れど、袂の涙乾す由も無し。

五月雨やかたみの襁褓干もあへず

（明治四十四年）

水戦



風雨雷雨

洪水後

田植すむ頃の土地

打初港

結婚式の人々

結婚の人々

東京神社

臺灣縱貫記

逆捲く浪（安平港）

大阪商船會社の汽船舞鶴丸は、今や碇を安平港の沖に投せり。時は十月一日の正午に近し。船は昨夕四時、清國厦門を解纜し、終夜臺灣海峽を横ぎり、今曉澎湖島の間を過ぎ、今漸く此所に到着したるなり。前夜來北東の風は西南より流れ來る潮流と衝突して、逆捲く浪は斷えず船體を木の葉の如くに翻弄し、時の移ると共に、風は益益強く、左なきだに四方開けッ放しなる安平港沖に着したるときは、錨を下したる船上も、猶ほ鞦韆に乘るが如く、高く低く二間餘りづゝ動搖して、尋常の艀舟や小艇は近寄るべくもあらず。去りながら帝國各開港場中最も港口の險惡を以て聞ゆる此地には、また之に應ずる準備ありて、頃て商船會社支店の小艇一隻、數個の竹筏を曳

き來る。筏は臺灣特産の徑四寸ほどなる太き竹二十本許を並べて編み、長さ三間許りに造り、上に一個橢圓形の桶を備ふ。桶は深さ二尺五寸許、恰かも水風呂の如し。筏は薄くして平らなれば顚覆の虞なく、また甚だ輕ければ如何なる船體に觸るゝも傷つくこと無く、桶は其の上に緊く結び着けられて、一たび其の中に入れば極めて安全なるも、波浪の昂低動搖强く、船より桶中に移るには、頗る困難なり。頓かて安平稅關の小艇一隻、また來り近き、商船會社支店員も稅關吏も、艇より竹筏に移り、竹筏より船腹の階段を攀ぢ、皆な頭上より潮水に濡れながら辛ふじて船に入り來る。余は稅官吏員の好意にて其の小艇に便乘し、先づ甲板より筏の上なる桶中に落ち、更に桶より小艇に助け上げらるゝとき、早くも無情なる浪は背後より襲ふて、外套は全く潮水に濡れたり。既にして小艇は岸に向つて漕ぎ出すに、風荒れ浪怒つて、四面濛々、雷だ舷側を打つ狂瀾の、雪の如くに碎くるを見るのみ。ズックにて掩ふたる船內の片隅に踞し、稍ゝ岸に近づきて前面を望めば、物あり、宛から激浪の上に双眼を見はりて

踊るが如し。怪みながら近けば、之れは港內に繫留する陸軍補給廠の小艇、舳頭に輪狀の救命器兩個を備ふるもの、遠く望めば巨眼の如くに見えしなり。如何に怒濤の爲めに眼眩みしとは言へ、尾花を幽靈と視しそれよりも甚だしきに、獨り自ら一笑す。

岸に近きて再び竹筏に移り、稅關の下に至りて上陸し、携へたる行李の檢査を受け、始めて陸上の人と爲る。昨夜來動搖の爲に食堂に入らざりし余は、此時急に空腹を感じ、而かも安平には旅館や茶店は一軒も無きに、終に面皮を厚くして山口稅關長代理に請ひ、新面識にも關せず、晝食を無心したりき。安平は斯かる險惡なる港ながら、臺南と島外各地との關門にて、全島中淡水に次ぐ第二の開港地、最近數年間每年約三百萬圓許の輸出入ある所、之を內地に視るも、下關、四日市を凌駕して、函館港と伯仲の間に在り。故に英獨二國の領事館もあり。稅關の背後なる高丘は、往時和蘭人の此地を占領したりしときに築きたる城址、三百年前の壘壁猶ほ存し、一株の老榕樹は、翼然天を壓し、數里の海上より航行者の目標と爲すといふ。

古府のかたみ（臺南）

安平より臺南まで二哩餘の間、陸軍補給廠の輕便鐵道あり。方三尺許りの板の底に、四個の小車を裝ふたる臺車と云ふを走らせ、一人の土人之を押す。俗に此の車を「トロ」と稱す。賃錢を拂ふて何人も借り用ふるを得。余も之を傭ひ、車臺に行李を横へて其上に踞し、一路平坦、疾行飛ぶが如く、二十分許にて臺南の西端なる「トロ」の停車場に達し、更に土人の曳く人車に乘て、保西宮街の旅館旭館に投じたり。爾來三晝夜滯在の間、一と通り市内を駈け巡るに、流石に全島中最も早く開けたる首府として、一萬五千の人家、五萬の人口、中に壯大の古建築、閑雅幽邃なる庭苑、儲は欝蒼として茂る老樹木など、遊覽地として目を慰むべきもの少なからず。中にも明の延平郡王祠、乃ち鄭成功の廟は、今は開山神社と崇められ、赤煉瓦の古廟巍然として城の如し。また舊時官立學校の名殘なる、海東、崇文、逢壺の三書院、何れも建築の壯を以て聞ゆ。また曾て和蘭人の築きたる赤嵌城は、今は陸軍衛戍病院と爲れるあり。また兩廣會館とて、清國廣東廣西兩省出身商人の集會場は、今は土地調査局に使用するあり。偖は四春苑とて、某富豪の舊邸、今は官民の倶樂部と爲れるもあり。何れも古雅愛すべきもの多く、殊に北白川宮殿下薨去の御遺蹟を訪ひ、當時の御病室と御病床に用ゐたる寢具などを拜すれば、戰場の習ひとは言ひ、金枝玉葉の御身にて、斯くまで不自由を忍ばせ給ひしかと、一見暗涙の催すを禁ずる能はず。今は官幣大社臺灣神社の出張所として、傍に祠殿を設けられ、素朴なる建築も、盡く阿里山の檜材を用ゐ、毎年十月二十八日御薨去の日を以て、臺灣の官民は盛んなる祭典を行ふといふこそ理はりなれ。若し夫れ市街の區劃は、今は市區改正を斷行し、中央に八間幅の道路を東西に貫通し、更に數條の横街を開き、大通りの家屋は多く内地風の建築に改められ、湯屋、髮結床さへ數多く、料理店、飲食店は各街に散在し、中にも料理店、吐月樓など、其の庭苑は他の四春苑の比ならぬも、また内地には見るべからざる趣味

あり。此の邊りは、神戸大阪地方より渡航せる蠻妓も其數五六十人あり。此地の生活は、內地と多く異なるなく、獸鳥魚肉は言ふも更なり、果物は內地よりも多く、文旦、鳳梨、芭蕉實、龍眼肉など、內地に稀なるもの多し。唯だ如何なる大厦高樓にも、夜間は天井に幾多の家守蟲現ばれ、時に席上に落ち來ると、また平生蚊多く、之に螫さるゝときは「マラリヤ熱」に罹るを最も厭ふべしと爲す。家守蟲は能く蚊を捉り喰ふとて、何人も之を追はざるなり。

砂糖黍の戰ぎ（鳳山）

臺南三晝夜の滯在中、其實一晝夜は鳳山と打狗との間に費しぬ。臺南より、南は打狗まで、北は嘉義まで鐵道通じ、一日四回往復す。時恰も廳司侍從武官、聖旨を奉じて臺灣各地を巡視せられ、十月二日安平に上陸し、直に臺南を經て鳳山へ赴かせらる。余は武官一行の汽車に隨行し、臺南より南方、車路墘、大湖街、阿公店、橋仔頭、楠仔坑、舊城を經て打狗に至るに、沿道各停車場には、附近の內地人は言ふも更なり、土人の壯丁團とて、警察官の指揮の下に、水火の事變に備ふる內地の消防夫の如き輩、出でゝ路傍に整列し、また家々には國旗を揭ぐるも、中には白地の木綿に、半面だけ赤色圓形の紙を貼り、甚だしきは日章も橢圓形を爲し、或は六七角形を爲すさへ見受く。打狗停車場より打狗港へは約二哩、同停車場より鳳山へは約十哩許。と もに輕便人車鐵道あり。余は先づ鳳山に赴き、西門街の怪しげなる旅宿に投ず。此地の旅宿は內地人の營業者四五軒あるも、何れも土人の小さき家を其儘用ゐ、少しく內部を改造して客室に充つるにて、臺南などゝは大相違なり。去りながら鳳山は全管內三萬七千戸、十八萬の人口を支配する鳳山廳の在る所、地方法院出張所、守備隊、衛戍分院、憲兵分隊、監獄支署、郵便局等の官衙あり。其の管內に一ケ年間約一千三百萬斤の砂糖を產し、米作は一年二作にて、三十萬石（內地の桝にて五十萬石）を收穫する所とて、市街は可なり賑ふ。內地人の事業は、料理屋と貸座敷とが各十軒ばかりと、

藝妓と娼妓とが何れも三十人許居るといふ外には、見るべきもの無し。然ども砂糖の産額は、全島第一の地方とて、臺南以南到る所汽車の窓より眺むれば、滿目盡く砂糖黍の畠にて、穰々として四方二三十里の間に連なるは、武藏野の昔、薄尾花の風に戰ぎしも、之れには如くまじと思はる。臺灣製糖會社の工場は、橋仔頭停車場の前にあり。此等の砂糖輸出の爲に、打狗港は從來久しく外國貿易港たり。翌る日、余は鳳山より例の「トロ」にて打狗に赴けば、此所は恰も伯耆の境港の弓ヶ濱が、中ノ海を擁する如く、內海と外海との間は、酒饅の口の如くに細く、市街は南北の兩岸にありて、北岸を哨船頭と呼び、「トロ」は此所まで通じ、英獨兩國領事館、大阪商船會社支店、其他小綺麗なる二三の旅館などあり。然ども打狗の主なる市街は對岸なる旗後街にあり。此所は一帶の長洲、南より北に走るもの約三里、其の盡る所、小丘を爲して其の麓に在り。丘上に燈臺あり、登臨すれば眺望甚だ廣く、水陸の景勝、臺灣全島中比類少なし。汽船は內海に入る能はず、所謂酒饅の口の外にあり。此所には鳳山支廳もあり、臺灣銀行の出張所もあれど、內地人の事業として見るべきは、僅に數戸の料理店、旅人宿、飲食店と、娼妓三十人餘、藝妓二十人許あるのみ。

囚徒の手わざ（嘉義）

鳳山と打狗とを一巡して歸りし翌る日、臺南にて監獄署と高島屠畜場とを見る。監獄には八百餘人の囚徒ありて、中には土匪の頭領分も多く、其の設備の整頓することは內地にも比類稀なり。また屠畜場は、每月豚一千頭、牛百數十頭、山羊數十頭を屠るといふ。之れも內地には比類無かる可し。午後三時三十分の上り汽車にて臺南を發し、新市、灣裡、蔴豆、新營庄、後壁寮、水堀頭など、演義三國志にでも見るが如き地名のみの各停車場を過ぎ、嘉義に着すれば六時二十分、日は全く暮る。停車場より嘉義市街までの距離十町許「トロ」の鐵道あるも、臺車なきまゝ、人車を駈りて池の端の武藏屋といふに投宿す。池の端とは、市街の西端に方一町許の池ありて、其の周

圍は、內地人の新開市街、旅館、酒樓、軒を連ぬるより斯くは名けたるとぞ。此所より一里許り隔つる所に半官半民設の模範製紙場ありと聞けども、行て視るの暇無りき。嘉義には嘉義廳、地方法院、監獄支署などあり。中にも監獄の囚徒を役し、全島到る所に叢生する林投と呼ぶ植物を原料とし、帽子を製するに、恰かも舶來の「パナマ」帽と同じく、將來甚だ有望の事業と云ふ。此事業は臺北にても、サミユル商會支店長荒井泰治氏等之を經營し、臺灣製帽合資會社と稱して既に盛に之を製出すと聞く。原料の林投は、畦畔にも、原野にも、全島到る所に夥多しく生じ、其の厚く長き葉を採り、縱に割きて其の纖維を採り、漂白して乾燥し、然る後編み上るに、帽子一個、一人約二週間乃至三十日間を要するも、其の價四圓及至十二圓許に賣り、一ヶ年の產額二萬個に上り、品質は舶來品に劣ること無しと聞けば、此島の南北に此業の起るは、甚だ喜ぶべし。シカシ例の淫風は嘉義にも吹き荒み、調子覺束なき三味線の聲、池の畔りに湧いて、紅燈の影を水面に映すことのみ先づ盛んなるぞ淺ましき心地す。

未成品の新市街（臺中）

嘉義より北、臺中を經て、三叉河まで三十里の間は、未だ汽車の便なく、唯だ輕便鐵道の「トロ」によるのみなるに、此邊の臺車は、皆な苦力二人を役し、時として臺車あれども苦力無く、或は苦力あれども臺車なく、待合はす爲に多く無用の時間を費やす。加ふるに此間には臺中を中心として、南には西螺溪、北斗溪、北には大甲溪、大安溪等の激流あり。何れも河幅一里に近く、平時は帶の如き數條の細流、網目の如くに交錯して流るゝも、一たび雨降れば水量忽ち增し、橫流氾濫、湖水の如く、怒潮に似たりとは、豫ねて聞きしが、余は嘉義を發して新高山を右方連山の上に眺めながら北行するに、不幸にも河々は概ね前日の洪水にて、輕便鐵道の架橋を流失し、それが爲に、河に會ふごとに、車を下りて苦力の肩に負はれ、先づ河を渡りたる後、臺車を竹筏にて運び、または次の「トロ」停車場まで徒步して後乘り換へるなど、旅行甚だ捗

らず。嘉義を發したる日は打猫街、大莆林を經て僅に六里許り往きて他里霧といふ小驛に一宿す。翌る日は、所々苦力に負はれて水量の常より增したる西螺溪を渡り、樹仔脚にて臺車を乘り換へ、更に北斗溪を渡る。此時一人の苦力に行李を荷はせ、他の一人の苦力の脊に負はれたるも、中流に至れば水深は背上なる余が腹まで水に沒す。名にしをふ濁水溪の下流とて、水は黑濁りに濁りて、水底は泥深く、苦力若し一歩躓かば、余は濁流中に溺れて死ぬべく見ゆるにぞ、俄かに怖氣つき、數條に分れたる河流の中にて、漕ぎ懸けたる一水を渡りて後急に靴やズボンを脱ぎて萬一の準備したるが、此時は既にチョッキまで盡く濁水に濡れたり。對岸の北斗に上陸して、東京館といふ旅宿に午餐を喫する間に、衣服を着かへ、汚れたるは洗濯を賴み、乾す暇無れば其儘に油紙に包みて携ひ發し、またも「トロを」急がせて員林を過ぎ、彰化の八卦山を仰ぎては、征討當時に戰死したる諸將校の墓地を思ひ、大肚溪の流れを渡りては、征討當時の苦戰を偲び、對岸の湖日庄に到れば、此所より北方に臺中までは二里、西方大肚溪の海に注ぐ塗葛堀港までは五里、何れも復線の經便鐵道あり。「トロ」の往來絡繹として、流石に臺灣の中部たるを表す。此日過る所は、全島中最も豐腴の地、水田遠く開けて稻作は年々二回收穫し、路傍には植たる許りの稻もあれば、正に刈り取りつゝあるもあり、また刈りたる跡を水牛にて耕やすもあり。內地にては四季の耕耘を、此邊にては一時に眺め、土人は皆な汗を流して働らく樣は、內地の農夫よりも遙に勤勉にて、曾て土匪の巢窟として知られたる地方も、今は最早其の隻影だに見えず、不知案內の一人り旅も、些の障礙をも感ずること無し。臺中に入り、小北門街の春田館といふに投宿す。臺中は元と繁昌なる都會ありしにあらず。我が領有後、臺中縣を置かれて、始めて新市街の成立ちし所とて、市街の設計は頗る大に、其の區劃は正しく、町幅は廣く、家屋は概ね內地的にて、旅館の構造など甚だ壯大なるも、臺中縣廢せられて、當初豫定の計畫變更せしと、町の南北に大河橫はりて、交通の不便なるとにて、土地の繁昌は未だ臺南の比にあらず。唯だ舊時の知事官邸と、常磐町遊廓との

みは、土地不相應に壯大なるを見る。然ども土人の戸數八百七十、人口三千百餘に對し、内地人の戸數約五百五十、人口約二千許なるは、土人に比べて内地人の割合に多きこと、蓋し全島第一なるべし。

島人の手ぶり（新竹）

時は既に十月の上旬ながら、臺灣はまだ内地の夏の如く、臺車押す苦力は、時々路傍の榕樹の下に、暑熱を避けて涼を納るゝも、車上の余は、車の走る毎に、涼風面を拂ひ、種々なる竹、檳榔樹、龍眼肉、榕樹、相思樹、芭蕉、靭王樹などの植物と、水牛、山羊、數百の家鴨の群などの動物、何れも目新らしく感じつゝ走り、午餐を胡蘆嶺の旅店にて喫し、再び臺車を乘り換へれば、間も無く大甲溪の河磧、此所は前日の濁水溪流域と違ひ、水は清く、石は大に、河水は幅員一里許の間を、此所彼所に流る。臺車を殘して行李だけを苦力に負はせ、水あるごとに負はれて渡るに、川底淺ければまた躓き溺るゝの虞無し。對岸にて他の臺車に乘り、後里庄に少憩し、行くこと二里許の間、丘陵を昇降すれば、更に大安溪の流れに到着す。河の形狀大甲溪と彷彿たり。北岸に一山あり。全山赤土より成り、雨降る毎に四邊より缺け崩れ、尖峯鋭く並びて天を指すさま、遠く望めば火炎の如し。土人は之を火炎山と呼ぶ。鳳山以北、海手に山を望むは之を始めとす。川を渡りて火炎山の半腹を歩し、北方に降るとき、急轉直下、車の走ること矢の如し。而かも巧みに車輪の齒止めを利用し、緩急自在、一回も脱線せず、苦力の手腕感すべし。二里許の間、二十分時にて走り、降り盡せば其所を三叉河と云ふ。北方より來る鐵道は、此日（十月七日）始めて此所まで開通し、今や最終列車の發せんとする一刹那、余は危くも臺車より轉じて汽車中の人と爲れり。三叉河は、小市街ながら、今日は鐵道の開通を祝ひて、綠門、國旗、角力、踊り屋臺など、全部落を飾り、雜踏言ふ可らず。蓋し開闢以來の賑ひならん　三叉河より、銅鑼灣を經て苗栗に至れば日は全く暮る。苗栗は此日開通式の式場なり。苗栗廳は停車

場より十二町許を隔つるも、車窓の外に近く見るを得。綠門、國旗、吊提燈など、內地其儘の混雜を眺め、旅宿の雜踏すべきを恐れて下車せず。直ちに北上し、新竹に到りて汽車を辭し、料理兼旅店の塚廼舍に投ず。停車場より市街まで、十町餘の間は土人の苦力が舁く轎に乘り、裝を解きたるは八時を過ぎたり。此地は臺北に次ぐ北部の都會、曾て新竹縣を置かれし當時、內地人の住する者五百餘人に及び、料理店、遊廓、藝娼妓等、第一に輸入せられ、且つ久しく北部鐵道の終點にして、また守備隊の所在地として、全盛を極めしと聞く。今は縣廳廢せられ、鐵道は苗栗より漸やく三叉河まで延長し、また當日の繁昌を見ざるも、新竹廳、守備隊、地方法院支部等あるゆえに、花柳の巷だけは甚だしく衰色を見ずといふ。余が泊りし旅宿なども、開通式の歸途、臺北の藝妓を伴ふて泊りたる客多く、終夜絃歌の聲囂しきに閉口せり。

全島の首府

新竹は平生風多き地と聞きしが、翌る朝上り二番の汽車に乘れば、會〻驟雨大に來る。安平上陸以後、雨に遭へるは此時を始とせり。新車、紅毛、楊梅壢、安平鎭、中壢、桃仔園、三角湧、枋橋の諸驛を過れば、次は臺北市街の一部なる猛仔にて、其の次は臺北停車場なり。其間中壢にて、辨當、パン、芭蕉實、煙草、鷄卵などを賣る。また枋橋は、小市街ながら、全島第一の富豪なる林氏の邸宅ある所、其の庭苑は公開して、何人にも見せしむ。余も前回此地に來りしとき一見したしりが、壯麗頗る目を驚ろかすに足るものあり。臺北驛にて鐵道は兩岐に分れ、一線は北方基隆港に達し、一線は西方淡水港に通ず。余は當初內地より基隆に上陸し、臺北に數日滯在の後、淡水より乘船して對岸の南淸に遊び、再び安平に上陸して北上したるにて、前に大かたの行李を託し置きたる臺北府前街の旅館朝陽號に投じぬ。全島領有の始には、臺北、臺南、臺中の三縣に分れ、三都會鼎立の觀を爲しゝも、其後三縣分治の制を廢し、總督府にて之を總べ、全島の命令は盡く臺北より出るに及び、他の各地の繁昌を減ず

丈け、臺北には政權商權とも集中せられ、左なきだに全島第一の都會、今は益々中央集權の勢ひを爲し、二萬四千の人家、八萬五千の人口、總督府に伴ふ諸官衙の外に、臺灣銀行もあり。大倉組も、三井物産會社も、車輛製造會社も、偖はサミュル商會、三十四銀行等、何れも支店を此所に置き、また殆ど世界唯一の特産物なる樟腦製造所も、帝國唯一の阿片製造所も、此地に在り。市區改正は既に行はれて、水道と下水とも、工事既に成り、百貨輻輳、車馬廣集、實に全島首府の名に恥ぢず。唯だ其の首府の建設は、近く三十年前に在りて、臺南に比ぶれば歳月未だ淺く、古雅の建築、森然たる老樹等の目を慰むべきもの少なきを憾みとす。然とも市街を西に去る二里の圓山公園は、官幣大社臺灣神社の在る所、淡水河に臨む劍潭の眺望、山青く水碧に、石大にして樹老ゆ。況や更に西に汽車を走らすること二驛にして、北投に至れば溫泉あり。四面に山を繞らしたる別乾坤、松濤園といふを第一とし、大小十戸餘りの溫泉宿は、臺北人士の爲には以て日曜祭日などの好遊園たり。更に西に走れば淡水港は、淡水河の海に注ぐ所、大屯、觀音兩山の間にあり。全島第一の開港場、一年の輸出入額一千六百萬圓に上り、古來臺灣茶唯一の輸出港なり。臺北は、城内と、艋舺と、大稻程との三市街より成り、中にも大稻程は、臺灣茶の中心市場にて、此所より輸出する年額は、烏龍茶、包種茶を合せて一千五六百萬斤、巨商軒を駢べ、淡水河岸には、米國領事館を首とし、歐米人の商店も少なからず。商業の殷盛全島第一たり。艋舺は内地人と土人との妓樓多く、不夜城の銷金窩なり。臺北城内は、周圍の舊城壁を壞ち、内地人と土人との商店多きも、商權は多く土人に占めらる。大稻程には内地人の勢力殆ど見るべきもの無く、唯だ艋舺の遊廓にのみは、内地娼も勢力ありといふ。

送り迎ひの雨（基隆港）

全島の内、東半部の生蕃界は、終に一歩も脚を容れず、余は唯だ西半部の沃野のみを走り、南方打狗鳳山より、一直線に將來の縱貫鐵道線路に沿ふて貫ぬき、臺北より

元と來たりし線路により、一時間の汽車は、錫口、南港、水返脚、七堵、八堵の各驛を經て、全島の北端なる基隆に着きぬ。此所は內地に對して全島の咽喉、海は北より南に彎入し、市街は海灣の兩岸に連なり、東岸を小基隆、西岸を大基隆と呼ぶ。棧橋は西岸なる停車場の後ろに連なり、日本郵船、大阪商船、兩會社の汽船は、之に繫ぐ。此の地は北端に山脈聳え、太平洋を吹き來る水蒸氣は、山に衝りて雲と爲り、山陰は雨を釀し易く、全島中最も雨天多き所、余は、到着の日も雨に迎へられ、出發の日も雨に送られ、再び基隆より日本郵船會社の汽船西京丸に乘り、臺灣を辭したるは十月十日の午後四時にして、岸を離るれば雨は間も無く霽れたり。（明治三十六年）

山水行脚

終

（山水行脚奥付）

明治四十四年七月二十三日印刷
明治四十四年七月二十六日發行

著者　坪谷善四郎
發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎
印刷者　東京市小石川區久堅町百八番地　水谷景長
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

定價金八拾錢

複製不許

（博文館印刷所印刷）

坪谷水哉氏著書

海外行脚

（近刊）全一冊四六判上製 紙數約三百頁　口繪寫眞版挿入

（定價未定）

是れ『山水行脚』と相俟て、著者が外國に於る紀行を網羅し、北清事變と日露戰役との從軍紀行、南清遊記、朝鮮紀行、露領西比利亞紀、內地紀行を首とし、歐米各國漫遊中の膝栗毛等、時には砲烟彈雨の間に跋涉し、時には邦人未だ足を容れざる未開地を探檢し、失敗あり、滑稽あり、冒險記あり、總て著者が近く十二三年以來の手に成り、舞臺は全世界に跨がり、行文また漸く老熟し、卷を繙けば宛ながら東西の大活動寫眞を見るが如し。『山水行脚』の讀者は勿論、其れを讀まざる人士も、本書は是非讀まざるべからず。

同君著　（全一冊四六判洋布特製裝釘美麗紙函入）

世界漫遊案內

正價金壹圓七拾錢　小包料金八錢

坪谷水哉氏著書

改訂增補 日本漫遊案內

地圖　上卷全國東半部　下卷全國西半部　着色精巧大地圖入

全二冊四六判上製紙數千三百頁　正價各冊金壹圓　小包料各八錢

本書は皆著者が親しく各地を歷巡して視察する所に據り大都名色勝地寺蹟神社佛閣溫泉浴場等の案內は言ふも更なり山海の形勝水陸の交通產業の情況風俗の美惡料理店舟車の費額土產物の調進に到るまで盡く是を詳記し傍ら歷史を說き古今の詩歌を挿み加之著者特得の各地風景寫眞を數百圖と各都市の銅版密刻圖數十餘種を添へ別に上卷に東半部と下卷に西半部の著色詳密圖を附す凡そ地方に旅行する者は必ず一本を缺くべからざるは勿論一室に在て坐ながらにして名勝を知り山光自然の美景を賞するを得べきなり

同君著　（全一冊四六判三九四頁）

改正市制町村制詳解

正價金參拾錢　郵稅金六錢

文學博士　姉崎正治君著

停雲集

最新刊　全一冊四六判上製　紙數五百八十頁　寫眞版四十餘頁　正價金壹圓卅錢　郵稅金拾貳錢

亡友を想ひ、異國の友と思を交へ、曾遊の地を追懷し、停雲徘徊して、追へども去らざるの情この一篇をなす。感想と記行とを經とし、繪畫と戲曲とを緯とす。清閑の友、旅窓の伴侶として、情緒と趣味の人に薦む。

同君著

◎花つみ日記

（全一冊四六判上製函入　寫眞版三十六枚挿入）　正價金壹圓卅錢　小包料金八錢

文學士　大町桂月君著

關東の山水

全一冊　四六判上製頗美本　紙數五百五十頁　寫眞版三十四圖入　正價金壹圓　小包料金八錢

露を吸ひ霞を喰ひ飄々乎として行き悠々然として止まる高山の巓窮谷の底健脚到らぬ隈もなく靈筆縱横關八州の名所細大漏らさず文章山水渾然一致し高士紙表に躍動し雲煙机邊を繞繚し人をして遺世超俗の思あらしむ洵にこれ大町桂月先生獨得の文境加ふるに地圖あり數十葉の寫眞あり中村不折、小杉未醒、丸山晩霞、高村眞夫諸先生の挿圖あり皆當代の逸品錦上花を添ふるの觀あらむ。

同君著

◎行雲流水

全一冊　袖珍裝釘　藩西紙　紙數三百頁　正價金參拾錢　郵稅金六錢

故大橋乙羽君著

耶馬溪

全一冊　袖珍上製頗美本　紙數百五十頁　寫眞版十數頁入　正價金四拾錢　郵稅金四錢

頼山陽をして耶馬の溪山天下に敵無しとまで絶叫せしめたる豐の耶馬溪、亦著者の周踏する所となり、其明巒の紀文と、靈妙の寫眞とは本書となれり、從來斯勝を髣髴する者は、獨り山陽の紀文ありしに、著者は山陽の未だ到らざりし所迄到り、其未だ寫さざりし奇勝をも寫したれば、斯書を一讀する者は遊意勃興好嚮導を得たるを謝せざる可からず。

同君著

◎千山萬水

（風景寫眞百廿景挿入）

全一冊袖珍上製　紙數七百二十頁　正價金五拾錢　小包金八錢

同君著

◎續千山萬水

（風景寫眞百廿景挿入）

全一冊袖珍上製　紙數六百五十頁　正價金五拾錢　小包金八錢

文學博士　井上圓了君述
（坂本麓郎君筆記）

日本周遊奇談

井上博士廿餘年間の旅行紀念！

本書は井上博士が旅中に於ける珍談奇說を—

—動物植物。牛馬舟車。山水溫泉。名勝舊蹟名物七奇。市町村里。衣服飲食。住家庭園教育學校。宗教教育。妖怪迷信。俗說俗解産婚葬祭。風俗習慣。娛樂遊興。人名地名言語文學。童謠俗歌。世態人情。修養訓誡吟詠語句。滑稽頓首。失策笑話。雜談雜類

の二十五類に分ち四百二十五を累ぬ失策談あり滑稽談あり一九的あり一休的あり一讀噴飯抱腹絶倒の說ある內にも先生の本領を談笑の間に示されたるは嘆服の外なきなり敢て机上の友として世に一本を薦む

全一冊四六判上製　正價　紙數三百八十頁　金七拾錢　郵稅金八錢

北米の花

田村松魚君著

（全一冊菊判表裝善美紙貳糎厚）

正價 金壹圓拾錢 小包料拾貳錢

著者は今の青年文士中一種の風骨を有す。年少氣鋭、未見の山河と未知の社會を研究し、別に其作風を起さんとするの慨あり。三十六年北米の野に遊び、留米六年間の長星霜具さに米大陸の天地に放浪し、研鑽琢磨功を積んで後歸朝。以て東都の文壇に立つ。此書は即ち著者が新らしき生涯と新らしき趣味とを世に公にせる其第一聲なりとす、卷中收むる所の長短篇小說數種及び隨筆數項は、皆北米の花の美と其艶麗を競ふ。

北米世俗觀

田村松魚君著　正價金參拾五錢　郵稅金四錢

永井荷風君著

あめりか物語

全一冊四六判　正價金六拾五錢　口繪十數葉入　郵稅金六錢

（目次）○船室夜話○野路のかへり○岡の上○醉美人○長髮○春と秋○雪のやどり○林間○悪友○荷友○寢醒め○夜の女○一月一日○曉○市俄古の二日○夏の海○夜半の酒場○落葉○支那街の記○夜あるき○六月の夜の夢●附錄フランスより○船と車○ローン河のほとり○秋の巷

（博文館發行）

新洋行土產

巖谷小波君著　久保田米僊畫伯裝釘

全二冊新形四六判美裝金模樣入美本（函入）

正價各冊 壹圓卅錢 小包料各八錢

先に伯林二年の觀察を洋行土產二卷に著はして爲に洛陽の紙價を貴からしめし著者は此度渡米實業團に加はつて在米三月間の見聞を新洋行土產として發表す著者が鋭利なる眼光と輕妙なる筆致とは世已に定評あり而して彼の實業團の渡米や亦本邦空前の擧なりとす本書他の外遊記に比して其光彩を異にせるもの素より論を俟たざるべし

寫生旅行 魔宮殿見聞記

吉田博君著亞書　正價金九拾錢　小包料金八錢

田中湖人君著

最新 倫敦繁昌記

全一冊四六判洋布上製七三二頁　正價金壹圓　小包金八錢

大阪毎日新聞評　神戸又新の倫敦特派員たる著者が一種奇警の觀察と輕妙洒脫の筆致を揮つて倫敦の表裏兩面を縱橫無盡に活寫せる通信を編次して一卷となせるなり本書に於て最も取るべき處は忠實によく倫敦の各種の社會を描寫し恰も一幅のパノラマを眼前に展開せる如き觀あらしめたる處にあり倫敦案內記としては蓋し其優なるものゝ一ならん

（博文館發行）

漫畫と紀行

小杉未醒君著

輕妙洒脫なる漫畫
二百三十個外にアート
ペーパ刷寫眞版八頁挿入

目次

○同中觀笑以下九圖○漫畫十二ヶ月○怪十五題○春興十二題○盜十五題○漫畫八十六圖○狩十五題○書生十五題○蠻勇十五題○春日記○通夜○木曾路○御獄詣○上毛の秋○伊豆繪師

全一冊菊判上製三百三十五頁
正價 八拾錢 郵稅金八錢

（口博文館發行）

各地方名所圖繪書類

石倉翠葉君著

- 本派本願寺名所圖繪　正價六拾錢　小包料八錢
- 大谷派本願寺名所圖繪　正價四拾錢　郵稅八錢
- 佛光寺名所圖繪　正價廿五錢　郵稅四錢
- 日蓮宗各本山名所圖繪　正價五拾錢　小包料八錢
- 成田山名所圖繪　正價卅五錢　郵稅六錢
- 善光寺名所圖繪　正價四拾五錢　郵稅八錢
- 日光名所圖繪　正價六拾五錢　小包八錢

東潭生君編

- 百觀世音靈場記　正價拾六錢　郵稅四錢

阪東、西國、秩父

長谷川雲旦君畫（全四冊和裝木刻一一七三枚）

- 江戸名勝圖會　正價六圓　小包廿八錢
- 江戸名勝花暦　正價八拾錢　郵稅六錢
- 東都歲事記　正價六拾五錢　郵稅六錢

332
120

332
120

022483-000-0

332-120

山水行脚

坪谷　善四郎／著

M44
ADB-0149